願わくば、私の傍に…

悦威カイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願わくば、私の傍に…

【Ｎコード】
Ｎ７２７１Ｕ

【作者名】
悦威カイ

【あらすじ】
組織から、一人逃げ出した。
コードネーム　ロゼ…　灰原哀の…過去の恋人だった…

※注意すべきところは、前書きにて予告させていただきます。
そして常に感想お待ちしています。

file.1 Memory thief（前書き）

オリキャラを出したいと思います。
彼がちょっと困った事とに…走行不良…

file.1 Memory thief

月夜の晩

あの、キラーマシンは現れる…

緋色の鮮血に身を染めて、
地のような瞳は私を捉えたまま離さない…

優しく抱きしめてくれた、

唯一、

私を抱きしめてくれた男（ヒト）

忘れられないまま、今を生きる…

あの時に、拘束されたまま…
私は今を過ごす。

助け出して？
連れ出して？

願いはきっと叶わないけど――――…

抱きしめて？
囁いて？

変わらない愛を…

そうして私は、2度目の恋をした――――…

叶わなくてもいい。傍に居られればいい。

貴方も、そうであればいい――――…

ｆｉｌｅ．１　Ｍｅｍｏｒｙ　ｔｈｉｅｆ（後書き）

皆様、これからよろしくお願いしマッスル。（痛）
ご意見を下さった、ｈｋｋｍ様。誠に有難う御座いました！！

＞（　｜）＜悦威カイ＞（　｜）＜

file.2　脱走者（前書き）

季節感。完全無視いぇい。（←本当にごめんなさい）

file.2　脱走者

始まりは…

ＦＢＩからの一本の電話…

雪のような、風来坊…

・・・

貴方にはもう逢わないつもりだった…

「灰原ッ！！」

窓の外の雪を眺めていた。
どんどん純白に染まる景色。
悪魔の呪いにかかった彼は、血相を抱え、私を呼んだ。

運命の日――――…

「なに？大声出して…どうかしたの？」

我ながらそっけない返事だ。
携帯を持ったまま、彼は私を廊下の方へ呼び寄せた。

「どうしたの？一応冷静沈着なアナタが焦るなんて…
蘭さんの彼氏でもできたの？」

「んなわけねーだろバーロー」

彼は呆れながら答えた。

・・

まぁ、もしそんなことが起こったのなら、相手を褒め称えてあげる…

殺されに来た勇気を…

「そんなことが起こったら、あなたが黙ってるはずないものね…ちょっと見て見たいけど。」
「そーじゃなくて、結構大事な話なんだから黙って聞けよ。」
「ＦＢＩからでしょ、電話。」

私は言う。

「あぁ…1人組織から脱走したらしい…」

思わず声が出る。

「コードネームロゼ…」

その名前に、思わず目を見開く。

「殺し屋だそうだ…って灰原！？」

彼が呼びかける。私の名前。

聞きたくなかった名前。

手が伸びてくる。

「触らないで！！！」

声を張り上げた。
手を払いのける。

「触らないでっっ…！！！」

悲痛の叫び。

嘘のくせに…
スキなんかじゃないくせに。私を抱かないで…
アイシテなんかないくせに…触れないで…

「灰原…！！」
「哀ちゃんッッ！？」
「灰原さん！！」

他の仲間（ひかり）たちも駆け寄ってくる。

息が出来ない。
地獄のような苦しみが襲いかかる…
まるで生き地獄だ…死ぬほど苦しいのに死ねない…

息が詰まって…

「灰ッ…！！！！」

気が遠くなる――――――…

ｆｉｌｅ．２　脱走者（後書き）

哀ちゃんは過呼吸で倒れました。
実は私も過呼吸持ちなんですが…あれかなり苦しいです。
体内の二酸化炭素が足りないことで起こるストレスから来る物らしいんですが…
最近は（ってかここ一、二年）全然平気です。
只でも、怒ると苦しくなる時がたまにあります。
あんまり怒らなくなったんですがね、たまに…

不快に思ってしまったら誠にすみませんでした。

それとキャラ崩壊が酷くなりそうです…すみません…

file.3　告白（前書き）

保健室ですよ～！！うきゃ～！！（↑どうした？！）

file.3　告白

「ん…」

消毒液の香りが鼻につく…
白い壁、硬いベッド…暖かい風。

（ここは…？）

保健室だ…

重い体をゆっくり起こす。

「気ィついたか？」
「…えぇ。私、運ばれたみたいね…」

本を読みながら呼びかける彼と、ベットから起き上がる自分。

「さっきまで、アイツらもいたんだけどな。」

彼はふっと笑う。

「追い出すの大変だったんだぜ？授業受けないでお前に付いてるって言ってよ。」

その言葉に、私も笑う。
焦らせる皆と焦る彼…見たかったかも。

「あなたは授業。」
「見りゃ分かんだろ？」
「人の事言えないじゃない？」
「俺は一回受けたもん。授業。流石に痛い。」

クスッと笑ったら、「笑うなッ」と彼からツッコミが入った。

「驚いたでしょう？」
「え…？」
「突然倒れて。」

突然出された私の言葉に、一つ間を置き、彼は頷いた。

「ロゼは…知り合いなのか？」
「違うわ。」

彼の言葉に即答する。

「昔の…」

重い口を開く。喉が渇いてる気がした。掠れた声。

「恋人よ……」

辛い。記憶。

忘れたい。想い。

でも…

あの温もりは…忘れたくない…

「出逢いわね…こんな雪の降る日だったの…」

窓の外を見る。

「別れも…そう。突然現れて、突然いなくなった…野良猫みたいな奴だったの…」

彼女の口から告げられた、悲哀（ラブストーリー）

哀しく、切ない…

でも、この真実が本当に解き明かされるのは…もっと先の事――…

ｆｉｌｅ．３　告白（後書き）

ありがとうございます！！皆様！！
アクセス解析を覗いて見たところ、思ったより多くてびっくりしました！！
（よくて２、３人と思ってました。）

これからもよろしくお願いします！！

感想評価等、お待ちしております！！

file.4 瞳

《彼は世界的凶悪犯…》

灰原（アイツ）の声が何度も流れる。

『記憶泥棒』

【検索】

「Ｍｅｍｏｒｙ　ｔｈｉｅｆ…聞いたこと、あるでしょう？」

この俺には、突きつけられた真実が、重かったかもしれない…

「どうしたのコナン君？」

蘭の声で、俺の思考はシャットアウトする。

「あ、ゴメン。何？」

オレの返事に苦笑いして、続ける。

「明日ね、依頼主が来るんだけど…お父さんが逃げ出さないように監視しててくれない？」

（逃げ出すって…なんつー探偵だよ）

俺はハハッと笑う。

「んじゃあさ明日、少年探偵団（アイツら）連れて来てもいい？」

「え？」

「おじさんの仕事ぶりを見て見たいって言ってたんだ。」

俺はにっこり笑う。

（この前は散々だったからな…）と内心苦笑いしながら…

「うん。分かった。ヨロシクねコナン君♪」

「うん。」

もう慣れた。名前（ウソ）

あと何度付き続ければいいのだろう…？

答の無い、自問自答が続く――――…

ｆｉｌｅ．４　瞳（後書き）

感想、評価お待ちしてます！！（ポイントも？）

オロ？地震だぁぁぁぁぁ！！！

（現在ＡＭ１０時ごろ）

file.5　薔薇

雪が静かに落ちる。
季節外れの紅い薔薇。今日衝動に買ってしまった。
不揃いに並べられているような、真紅の花弁。
その美しさに似合わない、鋭い棘は指を貫く。
伝う鮮血が、憎らしいほど紅い。

あれは…別れ？

あの男は、恋人だったの…？

（違う…）

忘れたい…？

（嫌。）

あの温もりに閉じ込められて…
綺麗な指が、頬を撫でる…
せめて夢ならば…ラクになれるのに…

出来るものなら…もう一度…

逢いたいなんて想う事…無いのに…

触れて。
抱きしめて。
キスをして…

それより…

傍に居たい――――…

傍に居て――――……？

このまま…

私はまた…溢れ出す悲しみを抱きしめて…眠る…

「ユエ――――…」

貴方の名前を…呟きながら…

ｆｉｌｅ．５　薔薇（後書き）

個人的に切なめの話にしたかったのですが…

自分、文章力無さ過ぎぃぃぃぃ！！！！！ｏｚｒ！！！

感想評価お待ちしてますぅぅぅ！！

でぁ次回！またお会いしたいです！！

file.6　微笑（前書き）

ミステリーってやっぱりいいですねぇ

file.6 微笑

コツン…

冷たい足音が響く…

瞳孔が開き…変な汗が湧き上がる…

――――奴ラガ来タ…？――――――

「ありがとうございます！！」

光彦が礼を言う。それに続いて残りの二人も。

「おっおぅ…」

小五郎は切なそうに顎を掻いた。

（こいつらが来なきゃあ…俺は今頃麻雀にぃ――――…くぅ～！！）

などと思いながら…

「今日はどんな依頼（しごと）なんですか？」

「自分の姉を探してほしいんだとよ。」

「へぇ…そうなんですかぁ…」

「どんな依頼主（ヒト）だろうね！！」

「美人だったらど～しよ。」

そんな雑談が始まる。哀はコナンに声をかけた。

「それで？依頼主はいつ来るの？」

「さぁ…？もうそろそろだと思うんだけど…」

そうコナンが言ったところで…

《ドクンッッ》

心拍が急に上がった。

背筋が寒くなる…思わずコナンの腕を掴んだ。

「灰原…？」

哀のその様子を見て、コナンは愛を自分の後ろに回す。

そして、時計型麻酔銃を起動させた。

コツン

足音が響く

（来た――――…）

グッと手の力を強くした。
瞳孔が開き、肩が自然に震える。

（ヤツラガ…）

コナンは扉をキッと睨んだ――――…

ゆっくりと扉が開き…現れたのは…

「子供……？」

コナンが漏らす。
そして後ろへ振り替える。先ほどまでの強い力は消え、哀は…

「気配が…消えた…」

「え…？」

その言葉に、驚くしかなかった…。

ｆｉｌｅ．６　微笑（後書き）

一話だけですがすみません…

沢山のご アクセス！！ありがとうございます！！悦威の心の励みです！！

千行ったぜぇぇぇ！！！いやっはぁぁぁ！！！（↑壊れ気味）

「これからもよろしくお願いします！！。」

file.7 姉

「姉ぇさんとやらの写真は？」
「あ、これです～」
その子…いや渚は写真を渡した。
「…！！」
映る姿は…
「ベルモット…！？」
哀は小さく言った。
「こっこれ、クリス＝ヴィンヤードじゃねぇか！！」
「違いますよ～」
小五郎のその叫びに渚は言う。
確かによく見るとちがう…目の色と…
「私の実の姉、静。今は二十歳カナ？」
ニヤリと、口元に笑みを浮かべた。
小五郎は、しゃーねーとため息を一つ吐き言った。
「車借りて、探しに行くか…姉さんの居そうなところは？」

「カラオケとか…今時の女子高生が好みそうなところ？」
「蘭。ナビしろ。」
「うん。」
車を借りて、出発した。

file. 8　出来事

「やっぱり。」

小五郎がそう漏らしたのは、言うまでもない。

探していたはずの女性は、無くなっていた。

刺殺。殺人の可能性は高い。

「やっぱりね…」

渚もそう漏らした。

・・・

「消されてっと思った。」

聞こえるか聞こえないかギリギリの声で。囁く。

「指紋とかは、」

小五郎が言った。

その言葉にコナンが耳を傾けたところで、渚が…

「首の頸動脈を一突き。しかも綺麗に…犯人の職業は特殊、と思うよ。」

そう告げる。周りはその言葉に驚いた。

「ここまで詳しいと…でもこんなに目立っていたらプロではない。部屋は荒れているし」

カラオケの一つの個室。電気はついていない。

窓があり、明るい。しかも開いている。

「窓からは逃げてない。足の位置がおかしいし～…」

入口に倒れる女性の死体を見つめながら、渚は告げる。

「まだここに居ると思うよ？」

そう言ってほほ笑む…

隠されていた、紅いような瞳…

少し…見えた。

一つの事件…

ｆｉｌｅ．８　出来事（後書き）

カイ「ナギ～…姉貴が殺されたのに素面（シラフ）って～」

渚　「ポケモン見にいきてぇなぁ～」

哀　「噛み合ってないわね、話。」

蘭　「更新遅くてすみません！！もっと早くできるよう頑張ります！！ｂｙ悦威」

カイ「感想、評価。お待ちしてます！！いっぱい下さい！！」

…アドバイスを…

file.9　幻（前書き）

いやぁ～出かけてきました～暑っちいです。

file.9 幻

「あれれぇ～？？」

その、コナンの言葉に探偵団は、不満を持った。

「そんなんだから、甘くみられるんですよ！！」

「何に媚びてんだよ！！」

「可愛いんだけどね…」

そんな言葉が伝えられた。

コナンは内心（前にも言われなかったっけ？）とか思っていたりする。

「ワンパターンね…」

哀も言い出す。

はぁと吐いたため息に、渚は笑った。

「？なんだよ。」

そう、元太が言うと渚は「仲イイなぁと思ってね。」と微笑んだ。

今のところ。コナンには犯人は分かった。とりあえずオッチャンを眠らせればいいんだが…

どうも、この渚という子に…見張られてるような気がして…

「大丈夫よ。」

哀がそうシャットダウンする。

「早く帰りたいわ、ここから。」

そう言われて、またコナンはため息を吐いた。

今回の事件…

探偵事務所（おっちゃん）に依頼された、人探し。
依頼人は月澤渚（つきざわなぎさ）…性別は…一応不明。
「私」と言うからには女の子だとは思うんだが…
まぁともかく。「姉を探し」が今回の依頼。
只しかし、その姉と称される女性は…何者かの手によって殺害されていた…
死因は、頸動脈を切られたことによる、失血死と判明。

その被害者の妹と言う渚…どうも似ていない。腹違いと考えたとしても、
姉が殺されたというのに、この妙な落ち着きっぷりは…
被害者の名は遠野静苗字（とおのしずか）が違うのは、両親が離婚したからと言うが…

高木刑事によると…彼女の親は離婚などしていなく、一人娘だという。

月澤渚の事も調べて貰ったが、戸籍はない。

何者なんだ…？コイツ…

file.10 緋色

「犯人は、お前だ！！！」

そう言って、一人の医師が…名指された。

お決まりの台詞…

「うぉらぁぁぁっ！！！！」

その男は拳銃を取り出す。そして…

「ちょっ！！離しなさい！！」

渚が捕まった。その犯人の行動に佐藤刑事が声を荒立てる。

そして…

「さっ！！佐藤さん！！！！」

一瞬の事だった。黒い車が現場を囲んだ。

「なッッッ！！！！！」

目を見開くコナン。

犯人の…仲間なのだろうか…暴力団組員が、次々と侵入してくる。

カッッ！！

杖が鳴り響いた。組長らしき男が前に立つ。

「そこをどけ、警察（イヌ）ども…」

低く…言い放つ…

すっとその場を引く佐藤。皆も同じ。

「助けに来てくれたんですね！！！」

犯人の男が嬉しそうに言った。しかし…

ｆｉｌｅ．１０　緋色（後書き）

皆様、いろいろすっとばしてごめんなさい＞（＿　＿）＜

file.11 ロゼ

「灰原…落ち着いて聞けよ…」

少年は口を開き言った…

「たぶんアイツは…ロゼだ…」

胸の奥で暴れだしたのは…何――――――…？

「えっ…？」

すっと、渚が手を真上に挙げた。

「ぐあっっ！！」

男の拳銃を握っている手に噛みつく。銃が落ちた。そして…

男の視界に影が落ちた。

「グっ！！！！！」

男の鼻に、渚の踵が堕ちる。

そして渚は、銃口を向けた。

「ちょ…お嬢ちゃん…それ本物だから、返っ…」

「賭けをしようか…？」

男の言葉を遮り言った。

「生きるか死ぬか…賭けてみない？」

浮かべた薄笑い。

隠されていた紅い瞳が…妖しく輝いた…

・

彼に纏う…威圧感。男は…失禁した。

一同は驚く。

「なんだぁ…つっまんねぇの。」

渚はそう漏らし、振り返った。

「爺さん!!返すよ〜?」

持っていた拳銃を投げる。

「ソレ、宴会かなんかで使うんじゃねぇのお?」

・・

「おっおう。よく分かったな坊主」

その様子を見て、佐藤刑事が確認に入った。

「本当だ…軽い…」

本物を持ったことがないと分からない。その位の違い。

微かにおかしい…

「灰原…」

コナンが言った。

「アイツ…ロゼかもしれない…」

微かかな違和感…

胸が鳴る…

「じゃあなぜ…」

哀は言った。

「あの強い組織の気配…なぜ消えたの…？」

…アノ時ト…同ジ…

《シホ…》

file.11　ロゼ（後書き）

次の次あたりに過去編を～…

file.12　名前

《シホ――――…》

やめて。

《オマエダケダヨ…》

言わないで…

《好きになったのは…》

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

哀が叫ぶ。そして…

フッ――――――…

意識が途切れた。

ドサリ

彼女はその場に倒れこんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「灰原ッッ!?」

「哀ちゃん!!」「灰原さん!!」「灰原!!!!」

見合が駆け寄る…。

「シホ…」

哀しく…彼女の真実（ナマエ）を呟いた。

「ゴメン…」

その言葉を…コナンは聞き逃さなかった。

気を失った。哀。

過去の…記憶…を夢（み）ていた。

彼女はすぐ、病院へ運ばれた。

ｆｉｌｅ．１２　名前（後書き）

…やっぱり。次の次から過去編です。

file.13　真実

「お前は…ユエだな…？ロゼ…」

この問いは。確信に近い。

少女は、眠っていた。ただ静かに…

「渚！！！」

突然名を呼ばれた。

「ジョディ…」

かつて、帝丹高校で教師をした彼女、実はＦＢＩの刑事の一人だった。

そんなジョディは息を大きく吸い込み、言った。

「Ｉ　ａｍ　ｉｎ　ｓｕｃｈ　ａ　ｐｌａｃｅ　ｗｈｙ!?」
（どうしてこんな所にいるの!?）

「Ｉ'ｍ　ｓｏｒｒｙ…」
（ゴメン…）

「Ｉｆ　ｙｏｕ　ｄｏ　ｉｔ，　ａｎｄ　ｄｉｓｇｕｉｓｅ　ｇｏｅｓ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｌａｃｋ　ａｎｄ　ｓａｙｓ　ｈｏｗ　ｍａｎｙ　ｔｉｍｅｓ，　ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｉｔ?」
（変装くらいしなさいと何度言ったらわかるの?!）

息を目いっぱい吸い込み、ジョディは続ける。

「Ｉ　ｂｅｃｏｍｅ　ｆｒａｎｔｉｃ，　ａｎｄ　ｄｏｅｓ　ｔｈｅ　ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ　ｌｏｏｋ　ｆｏｒ　ｙｏｕ…?」
（組織は血眼になってまであなたを探しているのよ…?）

「Ｃｕｔ　ｏｆｆ　ｅｖｉｌ…」
（悪かったって…）

苦笑いしながら陳謝する渚。

「あれ？ジョディ先生？」

院内での二人の口論に、蘭が口を挟んだ。

「え？あれ？」

ジョディは驚く。

「Ｉｔ　ｉｓ　ｓｈｅｒｒｙ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｃａｍｅ　ｔｏｍｅｅｔ…」

（俺はシェリーに会いに来たから…）

「え…？」

渚が言った。

そしてコナンが吐き出すかのように言った…

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｏｓｅ？」

（おまえはロゼだな）

その問いは、蘭には理解できなかった。

「Ｏｈ…Ｉｔ　ｉｓ　ｓｏ…」
（あぁ…そうだよ…？）
渚は言った。少し笑う。
「Ａｎｄ　…　Ｙｏｕ　ａｒｅ　Ｙｕｅ　…　Ｒｏｓｅ　…」
（そして…お前はユエだな…ロゼ…）

確信は…真実に変わった。

「It is a correct answer. I spy on the name wonderfully…」

（正解だよ。お見事、名探偵…）

ｆｉｌｅ．１３　真実（後書き）

英語だらけですいませんでした！！私も気持ち悪っ…（酔った）

間違いなどがあったら、ご指摘お待ちしてます！！

ｆｉｌｅ．１４　Ｔｉ　Ａｍｏ？（前書き）

過去編へ行きます。志保さんは１６歳位

ＥＸＩＬＥさんの「Ｔｉ　Ａｍｏ」がベースです。いい曲ですよ。

大好きです。この歌。

file. 14 Ti Amo?

あの運命の日――――…

貴方は哀しい瞳をしていた…

「それをずっと覚えてる。」

真っ白い雪が、景色を染め上げる。
鮮やかに…純白に染まる景色…

「Good morning is older sister.(おはようおねえさん)」

隣に住む老婆が言った。

「Good morning.(おはようございます)」
「It is great snow.(すごいゆきだねぇ)」

そう言って老婆は笑う。
私はその笑顔を見て、背後からかけて行く子供たちを見て行った。

「The snow shoveling is great(ゆきかきはたいへんだけど)…
A grandchild looks glad.(おまごさんはうれしそうですね)」

老婆はまた、クシャリと笑った。

「A grandma is serious!(ばーちゃんたいへんだ)」

老婆の孫が走り寄る。

「What, I am noisy.(なんだいさわがしいねぇ)」
「A person is dead!!!(ヒトがしんでるよ)」

「え…？」

思わず耳疑った。

案内されていった路地裏に…

貴方は倒れていた。

ｆｉｌｅ．１４　Ｔｉ　Ａｍｏ？（後書き）

英語だらけ第二弾。おえぇ…頭痛い…。

感想評価、お待ちしてます。

file. 15 Ti Amo?（前書き）

小さな豆知識。
イギリスとアメリカでは、同じ英語でもかなり違うらしいですよ。

file.15 Ti Amo?

「Ａｒｅ ｙｏｕ ａ Ｃｈｉｎｅｓｅ?」
（あなたは中国人?）

「混血（ハーフ）…かな?日本語でいいよ。
それとも、イギリス英語のがいい?」

その紅い瞳が…不思議と私を捉えたまま、離さない…

「驚いた。よく気が付いたわね…私が混血(ハーフ)だって。」
「瞳が、灰色っぽいしね…東洋顔なのに。あと髪色かな?」

先程倒れていた男は、運良く生きていた。
助け出され、私の家へと運ばれた。
近所の老女は、散々手をかけた後、シチューを置いて去って行った。
…人間なら普通、あんな雪に埋まっていたら凍死するだろうに…

「…俺は人間だよ。一応。」

彼は微笑んだ。

「胡散臭そうな顔してたら普通気づくから。」
「私そんな顔してないわ。」
「素直じゃないねぇ…」

そんな彼の前に、先程渡されたシチューを置いた。

「さっきのお婆さんから、」
「お〜うまそう。いただきます。」

おいしそうにシチューを頬張る彼。

「今度アンタの料理も食わせてよ。」
「今度って…また来る気？
別に構わないけど、私はアンタじゃない。
志保よ。宮野志保。アナタは？」
「あ、俺？」

そう言って少し彼は黙りこむ。

「名前、決めていいよ？」
「は？何、新手の商売？」
「違くて…俺名前ないのよ。」

そう言って苦笑い。

「中国ってさ、一人っ子対策とかってやってたじゃん？」
「ええ…」
「俺闇っ子って奴なんだよね…いわゆる。」
「戸籍さえない…って事？」
「うん。資金的に無理が出てきてさ…」

相変わらずシチューを食べながら言った。

「売られたんだ。ある組織に…」
「え…」
「身軽さを買われたのかな？」

彼はそう言って微笑んだ。

「コードネームならあるかな？宜しく、シェリー
天才殺し屋、ロゼです。」

「自分で天才って言うなんて…ナルシストなのね、ヨロシク、ロゼ…天才科学者、シェリーよ。」

そんなくだらない、自己紹介をして、笑いあった。

始まりの時――――――――…

「あなたがロゼなら…私はユエって呼ぶわ…」

ユエは中国語で月。

出逢った日の朝は、晴天で、月が見えた。

この名前を上げたのは…私…

file.15 Tiamo?（後書き）

今回長めです。スイマセン…＞（＿＿）＜

あと1話ほど。お付き合いお願いします！！！

file.16 Ti Amo ?

ロゼ…いやユエには…
右腕に絡まるように薔薇の蔓があった。

背が高くて、長髪…タレ目で…

そして何より…

右目の…緋色の瞳…

不思議な…緋色（チノイロ）

バラの紅、血の紅…
身も心も、真紅に染まる――――――…

「俺はシャーレで生まれたんだ。」
「はぁ？矛盾してるわよ。」

母親について聞いた。

「矛盾してないよ。シャーレで生まれた後、何処かの家族に買われたんだ。」
「それで売ってたら犯罪じゃない。」
「…あ、ホントだ。」

その言葉にため息を吐く。

「…って言うか…いつまでここに居るのよ。」

もう既に、夜。外はすでに陽が堕ち、雪がまた降り始めた。

「ってかさ――――…」

ユエは笑顔で言った。

「ココに住まわせてくれない？」

「は？」

普通。そうくる？

「軽すぎるわよ。あんた…」

file.16 Tiamo？（後書き）

すみません。あと1話…＞（＿＿）＜

file.17 Tiamo？（前書き）

哀ちゃん（って言うか志保ちゃん）は
依存するタイプな気がするんですよね…

個人的に…

file.17 Ti Amo？

「…料理苦手でしょ。」

その言葉に反論できなかった。

「火ぃ、噴いてるよ。」

「うぁっ」

「水跳ねるよ〜」
「熱っ！！！」

キッチンで…
私の苦手な事がバレた。

「ほらかして？やった上げるから。」
「……」

キッチンにある椅子に座る。

「上手いわね。」
「慣れてるからねぇ…」

軽快な包丁の音が響く。

「…そう言えば志保さんは、一人暮らし長くなかった？」
「悪かったわね！！いつも出来合えの物で済ませてるわよ！！」

私の言葉に笑うユエ。私は釣られて苦笑いした。

・・・・・・

「美味しい？」
「…うん。」

作ったのはパスタ。

ソースはさっきのシチューに手を加えたもの。

「でも冷蔵庫、本と何もないねぇ」

ユエの言葉に

「五月蠅いわよ。」

そう小さく返した。

「料理できないとモテないよ?」

「見た目だけで判断する野郎(バカ)共なら沢山いるわ。」

「あ――――～…」

ユエは続けた。

「ジン・・・とか?」

その名前に目を見開く。

「かっ…」

「か?」

「関係ないわよ!!!あんな奴!!!只のドSバカじゃない!!!!!」

そう叫んだ。

ユエはしばらくあっけに取られてから、

「顔真っ赤。」

と指摘した。

「ご馳走様！！！」

皿を置いて、勢いよく立ちあがったら
テーブルに膝をぶつけた。

「い――――――？～…」

「大丈夫か？」

「笑ってんじゃないわよ！！！」

「ゴメン。ほら、どこ痛いの？」

右手を掴む。

「好きなの？ジンの事。」

私の膝を見ながら言った。

「無理だよ？肉体的にも、精神的にも…」

「…知ってるわよ…」

そう小さく返す。

「だから諦めようと…忘れようと…」

何かが込み上げる…これは、涙？

「……ならさ…」

真っ直ぐな瞳。

「忘れさせてあげるよ――――――…」

優しい薔薇の香りに包まれる…

救い出してくれた。

迷いの日々から…

たとえ、血塗れの漆黒の翼が生えていたって…

私には…紛れもない天使に見えたんだ――――――…

温もりを感じながら…

ゆっくりと…白い波に…

捕らわれた――――……

file.17 Tiamo？（後書き）

…哀ちゃんは流され受け？↑
料理は教えて貰った設定で行きます。

最近暗いニュースが多いですね…（テロとか人身売買とか…）

「世知辛い世の中だぜ」

感想評価等々、お待ちしております！！！！

file.18　死亡（前書き）

ロゼ＝ユエ＝渚

file.18　死亡

目を覚ますと、辺りは白い壁。
そして、貴方は居た。

「…ユエ…？」

流石に…整理は出来ていた。
彼(ユエ)は…組織から逃げて来て…

「例の薬…飲んだの？」

その問いに、頷く。

「顔が、人に見られてね…あの探偵さんは見たらしいけど、
警視庁の方で、特徴が詳しく書かれちゃってさ。
倉庫に呼び出されて、突然後ろから撃たれちゃって、燃やされた。」

そう言って、ベッドの付近にある椅子に腰を掛けた。

「なら何で、薬を飲んだの？」
「お前を見たから。」

思わず聞き返す。

「逃げ出して、見つからないから、俺にも捜索に協力させられたんだ。」
「その時に…？その時に私が縮んで、生きてる事を知ったの？」

「ああ…あの探偵君は…似てたしな…工藤新一に…」
「それで気づいたのね…ＡＰＴＸ４８６９の効果に…」
「あぁ…ほとんど賭けに近かったけどな。」

そう言い終わった後。冷たい空気が流れた。
別れたと言っても、突然消えたに近かった。

「何で…分かったの…？私だって…」
「アイリッシュ…」
「え…？」

ふと出された、どこか聞き覚えのある名前。

「飲み友達でさ…酔った勢いで言ったんだ。
『あの工藤新一は、小さくなって生きてる。
あのシェリーに似たガキも、近くにいたんだぜ。』ってさ。」
「信じたの？」
「まさか。お前を見るまで信じる気はなかったよ。」

そしてまた沈黙。

「ねぇ…」
「ん？」

また私はその沈黙を破った。

「どうして…」

長年疑問に思い続けたことをぶつけた――――…

「私の前から――――「渚！！！！」」

その問いを、タイミングよくジョディが遮った。

file.18　死亡（後書き）

カイ「いわせねーよ!!!」

哀　「…逝かせましょうか?」

カイ「すっ…スイマセンが…
ちょっと引っ張って頂いても宜しいでしょうか…?」

渚　「お腹すいた。」

コナン「…次回だってさ。」

「あ…ごめん…」

ジョディは、二人の空気が違う事に気づき、とっさに謝った。

「いや…いいよ。何？」

渚はそう告げると、ジョディは…

「…貴方は本当にロゼなの？」

「「はぁ？」」

渚と哀は、声をそろえた。

「焼け跡から焼死体？」
「えぇ…今キールからの情報が入って…」
そうジョディは告げると、渚はため息を吐いた。
「あのさ～、そんなのどうせ、『現場』にいたホームレスとかじゃなくて？」
「…そうなの？」
「いやわかんないけどさ。」
そのやり取りに哀は笑った。
（…変わってない…）
ちょっと微妙に投げやりな口調が…
「？何にやにやしてんだよ。」
「してないわ。」
哀はそう言ってそっぽを向いた。
「してんじゃん。変態。」
「は？！なんであんたなんかに変態って言われなきゃなんないのよ！！」

「何かってなんだよ!!まるで俺が変態みてぇな言い方は!!」
「だってそうじゃない!!変態!!ドSバカ!!」
「バカはねぇだろバカは!!」

ぎゃあぎゃあと口喧嘩が始まる。

その様子をたまたま病室に入ってきたコナンは目撃して

驚いた。

普段無表情で、子供らしくない彼女が、口喧嘩ときた。

(…笑ってる…)

大声で笑いながら、まるで無邪気な子供のように…

「哀ちゃんは、渚の前だとちゃんと笑うのね」

ジョディが、コナンにそう耳打ちし、ウィンクした。

「ホントだね。」

その様子を見て、コナンは安心したかのように微笑んだ。

(ちゃんと…笑えんだな…)

そして二人は病室を後にした。

ｆｉｌｅ．２０　ｌｉｆｅ（後書き）

…まぁ、笑わないですからね、哀ちゃん。
後々、渚のイメージ絵をＰｉｘｉｖにでも投稿したいと思います。

感想評価等々お待ちしております！！

file.21　突然の呼び出し（前書き）

コナン視点

ｆｉｌｅ．２１　突然の呼び出し

…なぜか、共に旅行へ行くことになった。

好きだな旅行ネタ。

「問題です！！」

光彦が言った。

「これからどこへ行くのでしょーか！？」

「「大阪～！！！！」」

そう、なぜか服部に呼ばれ、大阪へ行くことになった。

「あら、探偵さんはあんまり乗り気じゃないのね。」

「…嫌な予感しかしないからナ。」

吐き出すかのように言った。

メンバーは

俺、博士、オッチャン、蘭、園子、歩美、光彦、元太、灰原。

そして…

「寝てんの？それ…」

灰原の膝の上に乗る、黒い頭を指した。

「寝てるわけないじゃない」

灰原がため息交じりに、渚の頭を小突いた。

「いいじゃないか、お前の膝気持ちいし」

「あんた、それオッサン発言だから。」

そう。なぜか渚も行くことになった。

あの後、ＦＢＩの計らいで、どこかの国の王子なんだ。

と適当な理由をつけて、戸籍はなくても、極秘でムリヤリ転入させた。

その後は、いつもの如く探偵団の誘われ、渚は面白がって加入した。

「そういえば、あの写真はなんだったんだ？」

ふと、疑問をぶつけた。

「え？」

「事件に持ってきた、あの写真の人物と、お前の関係だよ」

「あー…」

思い出したように、

「あれ、キャバ嬢だったの。」

「は？」

そう言った。

「『あの方』お気に入りのね？」

「…相当ベルモットを気に入ってるんだな」

そう言うと、らしいね。と渚は悪戯にに微笑んだ。

「…てか、お前何で来たんだ？」

俺は言う。

「え、だって見て見たいじゃん、西の名探偵」

当たり前じゃんと言うような顔をして返された。

って言うか…何で服部は俺たちの事呼んだんだ？

ｆｉｌｅ．２１　突然の呼び出し（後書き）

イメージ　―　悦威カイ　［ｐｉｘｉｖ］　ｈｔｔｐ：／／ｐｔｌ／ｉ／２０８６１４４７

渚君のイメージです。

興味のある方はどうぞ。

file.22　少年の時

「初めまして!!月澤渚です!!」

渚(ユエ)は、持ち前の社交性で早速、大阪カップルと意気投合した。

・・・・・・

「え、ホンマか!?それ!!」

「あぁ、アイツはコードネームロゼ。

『記憶泥棒』って呼ばれてたやつだ。」

服部家、廊下。

食事を終え、服部を引っ張ってきたコナン。

「記憶泥棒って…あの記憶を無くしちゃう奴やろ？」

「そうだ。」

「…ウチの親父、めっちゃ意気投合しとるで」

茶の間を覗くと、少し頬を赤らめ、
お酒により上機嫌になった刑事の一人がいた。

「めっちゃ敵対関係やで。えらい『記憶泥棒』嫌っとった一人やし」

「…あいつＦＢＩに拾われて、仲よくしてるくらいだしな。」

ははっと、その大阪府警本部長にお酌する渚を見て笑った。

「それ、仲間売ったって事か？」

服部は、そうコナンに聞いたが

「いや…」

この少女の言葉で、返された。

「あいつ。幼い頃から組織に育てられて、
恩とかあるみたいだしね。私もだけど…」

同じ組織に居た少女。灰原哀は言った。

「義理とか、人情に厚い奴なのよ、結構。
でも凄い情報とか入るわよ口を割らせたら、
『あの方』とだって会った事あるだろうしね」

淡々と告げた。

「ホンマか?それ。」
「さぁ?多分よた・ぶ・ん。でもアイツは優秀な兵器だったしね…」
「「兵器?」」

哀のその言葉に、コナンと服部が食い掛かった。

「…『あの方』…いや組織は…」

強い瞳。

でもどことなく寂しそうな…

組織の人間の目…

重い口を、哀は開いた。

「ゲームの駒としか思っていないのよ。私たちの事…
分かる？この意味…私たちは、手札の一つなの。」

日の光を当たり、育ってきた者にとっては…ありえない世界。

絶対に…足を踏み入れてはいけない世界。

もう既に、後戻りは出来ないようなところに…

少年達は立っていた。

file.23 Mysterious?

「…」

侍は、その場から一歩も動けなかった。

・・・・・

「渚!アンタ何?その傷!!」

風呂から上がり、戻ってきた渚に向かって、園子が言った。
周りの一同は、言葉を無くす。

それは、黒いタンクトップを着た、渚の躰に在った。

首筋から、堕ちる傷痕。

「あ、これ？」

渚は答えた。

「不注意で車に跳ねられちゃった時の傷です。」

その答えに服部は、

（いや、絶対何かで斬られた痕やろ。）

そう突っこんだ。

子供の体には似つかわしくない、
首筋から、堕ちる傷。
きっと胸部まで届いているだろう。

（だから…首まで隠れる服着とったんか？）

分かる者は皆、その傷が《怪しい》と感じていた。

なぜか、悲しそうに渚から目を反らした哀。

それに気づくものは、居なかった…と思う。

file.23 Mysterious?（後書き）

悦威「渚は動かしやすいね。」

渚　「お前によく似た性格らしいしね」

悦威「…そうじゃないと思う。」

file.24 Mysterious?

「ちょい、来なさい。」

怪しんだ、平次の父親　服部平蔵は、渚を呼びだした。

服部(へいじ)と共に。

・・・・・・・・

「これは、刀傷やな？」

そう、平蔵は告げた。

「ん～僕も覚えてないんですよね、あんまり…」

渚はそう答える。

「ほな、静華呼んでくるさかい、平次、ちゃんと見てろよ」

「俺はそのために呼ばれたんかい！！」

平蔵は立ち上がり、その場を去った。

「で？」

服部は言った。

「本当所（ほんま）は？」

「ジンに斬られた。」

渚は即答。

「…なんやロゼさん、えろうあっさり答えるんやなァ」

「隠すほどの事でもないけどね。キミは俺の正体知ってるから話したの」

「ほぉ。まぁしらん人がそれ聞いたらおかしい話やもんな。」

「よく分かってんじゃん。」

そう言って渚は、座らされていた椅子から飛び降り、あるものを指した。

「これ、本物？」

日本刀だ。

「え、まぁそうらしいけど…」

「日本人の感覚ってよく分かんねぇな、俺も欲しいけどさ。」

「ごめん。俺ァお前の感覚もようわからんわ。最後の一言のせいで」

ハハッと苦笑いする服部。

（あの、小っさい姉ちゃんみたいに、
ガキらしくはないようには見えんけど…
話してみるとよぉ分からん奴やなァ…なに考えてんのか全然分からへん。）

「んで…探偵さんは幼馴染の子が好きみたいだね。」

渚は、刀を見つめたまま、そう告げる。

「あぁ、言い間違えた。あの探偵さんの周りには…かな？」

にやり、不敵に微笑んだ。

「え…？」

よく状況が理解できない。

「和葉ちゃんって娘（コ）の話。」
「あ、アイツは只の幼馴染や」

和葉の名前が出て、やっと状況を理解した。

「…ホントに？」

そう聞き返す渚。今度は真っ直ぐ服部を見る。

「あ、おう…」

そう目を反らす。

「ガキくさ」
「何やと！！」

渚が答えた。

「ガキにガキ言われたないわ！！」

そう言って渚の方へ一歩、歩みだしたところで…

シュッ

そんな音を立てて、飾られていた日本刀が、服部の首ギリギリで止まった。
あと、もう一二ミリ程度の距離で止まる…

「あのね、人ってのはヤル事やってから、やっと大人になるの。
それと、君よりいくつか年上だから、俺。言葉使いにに気ぃ付けて

？」

そして、ゆっくりと、刀が元の場所に戻された。

「遅なったな、渚君。」

その時、平蔵が静華を引き連れて帰ってきた。

「…ん？平次、なに変な顔しとるん？」

静華は言う。

「いや…なんでもない…」

そう答えた服部。

（あの刀えらい重いのに、何で片手であんな軽々持ち上げられたんや？！）

不覚にも、少年は一歩もその場から動けなかった。

file.24 Mysterious?（後書き）

渚　「銃撃戦と接近戦が得意です」

悦威「口喧嘩が好きです」

渚　「痴話喧嘩はイラッと来ます。」

哀　「だんだん主旨からずれています。」

コナン「…感想評価等々、お待ちしています。」

file.25　快晴の空（前書き）

ナギの前だと、さわやかな哀ちゃん。

file.25　快晴の空

「それじゃぁ、男子と女子に分かれて。」

そう快晴の空の下、似合わず爽やかに告げる彼女(あい)を見て、

「お前、そんなに嬉しそうに言うことないだろう。ってか恐いぞ」

一同の気持ちを代弁した彼(なぎさ)に、皆は心の中で頷いた。

男子軍、女子軍と別れ、大阪観光をすることになった一同
理由(ワケ)は…

「俺女子軍がいい。この探偵さん達と居たら絶対事件が起こる。」

「いや、来ないでくれない？あんた両刀（バイ）なんでしょ？良かったねハーレムよ」
「むさくてヤダ、楽しくないからヤダ」
「別にアンタが楽しめなかろうと、私には関係ないわ。」

こんなわけ、

女子一同としては（一部除く）

「今日ぐらいは事件に遭遇したくない」らしい。
あと「振り回されたくないという」

まぁ、ともかく…

観光は始まった。

ｆｉｌｅ．２５　快晴の空（後書き）

哀　「私達は当分出番無いの♪」

渚　「嬉しいか？そんなに嬉しいのか？？」

悦威「…嬉しいと思うよ。」

file.26　苺味の休日？（前書き）

たくさんのご アクセス！！いつもありがとうございます！！

file.26　苺味の休日？

「…疲れた。平次オンブ。」
「なんやねん。しゃーないなぁ…」

そんな行動を横目で見つつ…

「服部(おまえ)なんだかんだ言って面倒見いいよな」

苦笑いしながらそう告げた、コナン少年であった。

「たこ焼き食うか？」
「食べる！！！」
「食う。」
「俺も。」

平次の問いに、元太、渚、コナンと続いた。

「光彦？」

コナンは言うと。

「じゃあお言葉にあまえて…」

と子供らしくない発言を光彦はした。

おっちゃんと、平次の父親は不在。（博士は安全（？）の為に女子軍へ）
まぁ、そこでもう既に嫌な予感のする方はいるだろう。

あと、後付だが今は近所のお祭りの真っ最中。
知り合いとかに会っちゃったりするわけで…

「よぉ！！はっと…り？！」
「なんやねん。来とったんかお前らも」

同級生（クラスメイト）に会っちゃったりするわけで…

そんでもって、探偵稼業とかでそこそこ顔が売れてる人物であるからして…

「服部君いつの間に子供こさえたんか?!」

そう騒ぐ女子生徒が居たりするわけで…

「ちゃうわ!!東京の方の知り合いの子供(ガキ)や!!」

「うっそ!!ちょっと、高橋!!」

「佐藤!!大変や!!大変!!服部がガキこさえたで!!」

大体そう言う輩は団体さんだったりするわけで、
あっという間に人だかり。

「俺のガキとちゃう言うとるやろ!!!」

そんな平次の叫びは虚しくこだました。
まぁそんなのも気にせず…

「平次!!アンタも来とったんか…ここ」

幼馴染(かずは)ご一行は来ちゃったわけで…

「かっ和葉お前なんちゅうタイミングで…」

「あ、お母ん!!待ってたでぇ!!!」

まぁ、中身が大人の悪がきは…

「なっナギ!!」

「やっぱり〜!!あのお嬢ちゃんの母親和葉はやったん!?」

「何でアンタらいるのん？」
「幼馴染カップルやん流石！！」
そう同級生（クラスメイト）が言ったところで…
「え…えっえっ！？」
鈍感少女（かずは）はやっと状況を理解し…
「そんなわけあるかいなぁ！！！」
頬を紅潮させ叫ぶ和葉に
「そんなの皆気づいてるよ」
渚はちょっと飽きたらしく…
冷たくそう吐いた後。
「平次かき氷食いたい」
と、次の行に移っていたりする。
「…何味や。」
平次はもう一刻も早くその場を去りたそうであった。

「苺味」

超甘党な渚少年はそう答えた。

ｆｉｌｅ．２６　苺味の休日？（後書き）

悦威「…事件起こさなくていいかなぁ」

渚　「そうして。」

哀　「私しばらく出番なかったんじゃないの？」

悦威「アドリブです」

感想評価等々、お待ちしております！！（もちろんポイントも）

file.27　苺味の休日？（前書き）

光彦君の疑問

file.27　苺味の休日？

「苺味」
「…甘いぞ」
「いいのもっと甘くてもイイ」

そんな超絶甘党発言をした渚少年に対し…

「？光彦食わねーのかぁ？」
「あ、食べますよ。元太君にはあげません！」

まぁ、哀ちゃんに片想い中である渚君に敵対心（ライバル）を燃やしていたっておかしくはないのであろう。

「合っ変わらず甘党ね、あんた」
「食う？美味いよ。」
「ちょーだい」

そのやり取り

「かっ…間接キス…！！」

光彦は言う。
それは自然に行った事であり、
実際の「真実（ホント）の姿」の時に肉体関係を持っていた二人にとっては別に嫌とかそう感じる訳でもないため…

「あーあ・・・」

フォロー入れとこうかなぁとコナンは考え込むが

「なに、妬いてんの？」

哀を引き寄せ、にやりと笑う渚。

ここら辺で教えておきましょう。

彼の嫌いなもの。

「平和（へいわ）」

好きなものは「糖分」

それと何より…

「そ、そんなんじゃないです！！

は、灰原さんが嫌がってるでしょう！だからっ！！」

「いや、抵抗してないよ、哀」

屈辱とかまぁ…

そう言うのを受けて悔しがるのを見るのが好き。

優越感とかそんなのじゃなく…

只試行錯誤するん開けど空回りしてるのを見るのが大好きな

「頑張ってね？射的行こうぜ、哀」

「え、あ、ちょっと！？」

ドS少年でありましたとさ

file.27　苺味の休日？（後書き）

私も光彦君をいじるのが大好きです。

file.28　苺味の休日？（前書き）

シューラバ！修羅場が来ました？

file.28　苺味の休日？

「今時の子はマセてるねぇ。」

それはそれは楽しそうに語る渚君
哀は…ため息と、わずかな笑みがこぼれた。
その意味は、彼の笑顔が好きだから。
その笑顔があれば、どんなに小さなことでも笑える。

「射的やる？」

その渚の問いに

「ええ」

それは嬉しそうに

「やりましょう！」

答えられるのであった。

彼女の殻を破る事の出来た、渚（ユェ）の技。

・・・・・・・・・・・・

「さて、服部。」
「あぁ、始まっちまったな工藤。」
「どうしようか」
「どうするんや？」
「アイツは射的をしていると思うが」
「探しに行くか？」
「正直いかない方がいいとも思う」
「何で？」
「光彦に探させるのが適作だろう、俺が探しても意味はない」
「確かにな。でもアイツ、タチ悪いなァ」
「あぁ…」

階段中の探偵は言った。

「あれは心底楽しんでいる顔だった」

実に、ホラー。まさにホラー！

「服部さん」

そんな会話をしていたら光彦が平次に声をかけた。

「なんや？」
「ちょっと」

まぁ、探偵団はマセガキの集団。

「灰原さん探してきます」

まだ弱いが鬼気迫るものがアリ・・・

「行ってらっしゃい、気ぃ付けてなぁ…」

平次は弱弱しく送り出した

「気ィ抜けてくるわ」
「同感だ。」

探偵さん達はともに、苦笑いした。

file.29　苺味の休日？

「プレゼント？」

渡されたのは、貯金箱。

「いや、いらねーから渡しただろ、お前」
「うん。」
「そこ頷いていいんかい」

まぁそんな小さな漫才を終え、

「光彦に会わなかったか？お前ら」

コナンは聞く。

「光彦？会った？哀」
「え…会わなかったわよ」

二人は言う。

「なんか嫌な予感がするんやけど」

平次は言った。

射的をして、適当にふらついて帰ってきた渚と哀。

二人を探しに行ったが蹴ってこない光彦と…

「ねぇ服部君」

「何や?姉ちゃん、それに和葉」

嫌な予感は的中…なのか…

「歩美ちゃんと元太君もおらんのや!」

三人組が迷子（?）になってしまった（?）

「ありがちだな」

その渚のコメントに

「異論はないわ」

哀は頷いた。

file.30　苺味の休日？（前書き）

花火ネタ在沖

file. 30　苺味の休日？

「めーたんてー」
「やめろそれ気が抜ける」
「奴らが行きそうな所に心当たりないの？」

渚のその発言に足を止めたコナン。

「それもそうね、何かない工藤君？」
「確かに、所構わず駆け回るんは、探偵の足には合わんな」

哀、平次が続いた。

「一応、新一が一番あいつ等とは付き合いが長いしね」

渚が言った。

和葉と蘭とは別れて捜索。
博士には元の場所で待っていてもらっている。

コナンは考えるが…思い浮かばない。

「…屋台の付近でも探すか。」

人目のあるあたりを探すことにした。

…その頃光彦は…

「待ってよ！！光彦君！」
「いい加減元に戻らねぇと怒られるぜ！携帯もなってるし…」

歩美、元太は言う。
光彦はただ、俯きながら歩き続けていた。
携帯や、探偵バッチから音はなるが、応答はしない。
そんな気分じゃなかった。

それは、

「渚（ユエ）と哀（シホ）」を見てしまったから。

すぐに、見つかりはした。
射的をしているだろうという話を聞いていたためだ。
だが…

声を、かけられなかった。

彼女（アイ）に…

ｆｉｌｅ．３０　苺味の休日？（後書き）

次は光彦君の回想シーン

ｆｉｌｅ．３１　苺味の休日？

走る。途中と売りかかった射的をしていた屋台に。

だけど…

「はいば…」

声をかけられなかった。

「ユエそれ！その人形とって！」
「おっしゃ！」
「坊主！次は俺が勝負やで！」
「もうやめてくれぇ！」

沢山の人だかり。

「俺の勝ち！」
「うっわ！ぼろ負けやん」
「五月蠅いわボケぇ！この坊主が強過ぎなんや！」

一発で、目標を仕留めた渚君

「はいよ。お目当てのブツ」
「ありがと。」

そう言って笑う灰原さん
今まで見たこと無い、最高の笑顔で。

「光彦くーん！」
「光彦ぉ！」

二人が駆け寄ってきて、たまらずその場を走り去った。

見ていられなかった。

灰原さんが、あんな無邪気に笑う灰原さんは見たことなくて

渚君はその笑顔を…

灰原さんにさせる事が出来るんだ。

ぼくには、無理だ…

あんな笑顔は…僕に向けられることはないかもしれない…

file.32　苺味の休日？

「あれ」

哀はそんな声を上げて立ち止まった。

「どした？」

「ユエ、あれ…」

哀が指した先

「円谷君たちじゃない？」

光彦たちは

からまれていた。

理由はありがちなぶつかっちゃった…という

「タチの悪そうな連中やなァ…って渚!!」

渚は走り出す。

平次は思わず追ってしまい

「平次お兄さん!」

歩美が名前を言ってしまい…無論

「お前がこいつらの兄貴か…」

保護者として絡まれてしまうわけです。

「お前んとこの弟さん方のせいで怪我してしまったんや！どないしてくれるん？」
「いや、ちょ、待ちましょや、怪我？こいつらがぶつかっただけで？」
「治りかけやったんやでぇ！！！どないしてくれるん？」
「痛い痛い！！痛いよ～！！」
「ほらめっちゃいたがっとんやん！！医者料だせや！！」

「ぶっ」

噴出した。

「渚！お前のせいでこないな事になっとるんやろうが！」

平次は言う。

実際ここで手を出したっていいが、
学校側とかオヤジから怒られるのは間違いなし。

いまほら、携帯出して平次の顔をちらちらと見比べてるから…

（顔売らんとかな良かったわ）

初めて探偵と言う職に就いた（？）という事を後悔した。

「行ってユエ」

哀は渚に囁いた。

渚は笑いを止めた。

「俺はユエじゃないよ。今は」

「じゃ、渚。」

哀は言いなおし告げる。

「彼は顔を売っちゃってるから、ヘタに手を出せばどうなるかわからないわ
だから、どうにかして。」

その言葉に、一つ。ため息を吐く。

「どうにかって…どうすんの。」

「あんたならできるでしょう。アレを倒すぐらいは」

「灰原。どんなに強かろうと渚は…」

「再会した時。あいつは何をした?」

「あ、」

よぎる、渚の行動。

また一つ、ため息をつき渚は聞いた。

「それは、命令?」

その言葉に哀は

「いいえ、頼みよ」

そう答えた。

「なら、仕方ねぇな。」

file.33　苺味の休日？

「お兄さん。平次兄ちゃん離してあげて」

一瞬気が逆立つ作り声で言った渚。

「ん？お嬢ちゃん。どんなにかわいい顔しても離せないねぇ」

いかにもチャラ男が言う。

「へぇ。じゃあ…泣かせてでも離させた上げる。」

「は？」

「走りまわされてさぁ…すんげぇ虫の居所ワリィんだよな。」

「何言ってんのお嬢ちゃん」

周りの仲間も、笑う。

そりゃあ、小さな体で（お嬢ちゃんと間違われ）喧嘩を売られたって

「平次兄ちゃんめっちゃ喧嘩弱いし、ね？」

「んなわけないやろ！！いい加減なことで同意求めるなや！」

「兄ちゃん喧嘩強いんやな？」

チャラ男は言う。

「おりゃぁ！！」

そう男が、拳を上げた…が

平次は避けていて、一発。

「やっちゃった」

と一言。和葉が言った。

「あれ？和葉姉ちゃんに、蘭姉ちゃん」

コナンが言う。

「あ。」

蘭は漏らす。

それは渚が、

平次の行動（殴り）を合図に
ほぼ全員やっちゃったから。

「弱っ！どうする哀。パンツ脱がして宙づりにしとく？」

と渚のコメントに対し、

「いや…」

止める訳もなく

「いっその事生まれたままの姿で、宙吊りなんてどう？」

哀は答えた。

「いや死ぬから！宙吊り無し！ってかその前にやめろ！」

コナンは止めた。全力で。

そして光彦は、

またショックを受けた。

ｆｉｌｅ．３３　苺味の休日？（後書き）

イチゴ味の休日終わり。オチ？考えてないです。

感想評価等々、お待ちしております。

file.34　花火（前書き）

珍しく事件が起こらなかった一行。
しいて言えば、平蔵さんが酔っぱらった事件。

file.34　花火

ドーン

「花火。初めて見た。」

渚が言う。

「私も。」

哀は頷く

「やっぱ綺麗。」

そう言って、艶やかに微笑んだ。

光彦は思わず見とれてしまう

少女の、大人びた言葉、全てに。

「コナン君」

「え？」

光彦は問いかけた。

「前に言いましたよね、僕に」

「何を？」

「僕には灰原さんは手に負えないって…」

「あぁ…言ったな。」

過去の自分の発言を思い出す。

「今も…おんなじですか？」

「え？」

「今の僕でも、彼女は手に負えないのでしょうか？」

その問いに、

「あぁ…」

そう答えた。

「無理だな。今のお前じゃ…」

「どうしてですか？」

光彦は言う。

「どうして僕じゃ、ダメなんですか？！」

コナンは答える事が出来なかった。

ダメなのは…

共に戦い、支える…

包容力が、足りないから…

渚には、勝てない――――――……

愛の深さが、違うから…

ｆｉｌｅ．３５　手紙（前書き）

悦威と言う季節を皆は歩んでいます。

file. 35　手紙

帰還したコナンたち。

渚の戦闘力（？）には驚いていたが、

渚が…

《お父さんがジ●ッキー・チェンにハマった時にカンフーを教えられたんだ》

と適当にフカシ、誤魔化した。

実際は、傭兵経験があったからと言う。

（でもカンフーは本当に教えられたことがあるらしい）

が、そんな話は過ぎたことで…

「好きです！！月澤君！！」

と転校して間もなく、高学年のお姉さん（？）告られた渚と

「好きなの！江戸川君！！」

やっぱりどこ行ってもモテる、名探偵であった。

「『一目ぼれです。歳の差とか私は気にしてません。出来ればつきあってくれませんか？』」

「だってさ。」
「だから何よ。」

教室内。

机に座り、哀の前で頂いた手紙を読んだ渚。

「邪魔なんだけど？」
「妬いた？」
「妬くわけないでしょう。声真似気持ち悪い」
「ウソ！完璧ジャン」
「五月蠅い！」

思わず、声を張り上げてしまった哀。

「ごめんなさい」

そう言って、俯いた。

「あーそっか、」

渚はにやりと笑う。

「今度は何よ！」

「機嫌が悪いのは…」

手紙を哀の額に当て

「生理中か？」

「んなわけないでしょ！！！無くなったわよ！！」

また口論

「ねぇ、哀ちゃん。」

おずおずと歩美は聞く。

「せいりって、何？」

哀は顔を真っ赤にしたまま、

「将来嫌でも来るようになるわよ」

そう言って、俯いた。

普通の日々になるはずだった…時。

「あ、そうだ。俺とコナン。その娘（コ）にデートに誘われたから、遊園地へWデート?行って来るね。」

渚の発言に

「勝手に行け！！」

冷たくあしらった哀であった。

「え、俺も行くの?」

コナンのその発言に

「女性の誘いを断っちゃ、いい男の成れないよ～名探偵」

そう渚はウィンクした。

「別になりたくねーし」

そうコナンが呟いたのは言うまでもない。

file.36　ツンデレガール？

「あのーなんで…」

光彦は憂鬱な空に向かって言った。

「尾行なんかするんですかぁぁぁ!?」

「円谷君静かに!!」
「見つかっちゃうでしょ!」

哀、歩美は言う。

場所はトロピカルランド。

目標は…

江戸川コナン　月澤渚

そう、彼らのデートを尾行けていた。

・・・・・・・・・・

「さて、」

やはり、首元が隠れる格好であるが、ラフな服を着た渚。
身長がそこそこあるため、小学校高学年には見えるだろう…

「バレてるのいつ気づくかねぇ」
「…気づかねぇンじゃねぇの？」

渚の発言に、コナンは言った。コナンも同じくラフなスタイル。

「賭けんべ、昼に気づくに千円」
「それじゃ俺は事件が起こって気づくに千円」

そう言った後。

「俺が当たったら嫌だな」

コナンは言った。

「やっぱ千円じゃなくて五百円かけるね。」

「…たぶん当たるだろうな。」

勿論。

当たると思います。

青空に向かって、吐き捨てておきましょうか。

file．37　ツンデレガール？

「あ、すみません。お待たせしました。」
「遅くなってごめんなさい。」

相手方が現れた。

「いや、大丈夫。可愛いカッコだね、良く似合う」

渚は言う。

二人とも小さくお礼は言うが、たぶん

尾行中の…アイツらには聞こえていない。

「楢崎（ならざき）　杏奈（あんな）　小学五年１１歳
その妹、楢崎（ならざき）　沙良（さら）　小学一年生７歳」

「黒髪のセミロング。姉の方は少し巻いてるわね…
二人は色違いのワンピースにそれぞれのアレンジをしてるわね…」

歩美、哀と言う。

ついでに二人は、歩美はスカート。なんだっけ、今流行ってる感じの格好。
哀は大人っぽく、ジーパンにハイネック。シンプルである。

あぁ、たぶん聞こえてないね。

「何で、尾行とかすんだ？」
「静かにして、元太君」
「何かあるんですか？」
「五月蠅いわよ円谷君」

尾行してる理由（ワケ）

えぇ、たぶん。

嫉妬でしょうね。

file.38　ツンデレガール？

まぁ、渚が5本目のアイスと、
コナンがコーヒーをブラックで注文したところで

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

悲鳴が聞こえてきたわけです。

「ごめん二人ともここから動かないでね」

渚は言う

「あ、坊ちゃん！アイス！」
「そこの女の子にあげて！」

悲鳴のした方へ走り

「元太！光彦！歩美！灰原も！！でて来い！」

コナンは隠れている皆の方へ声をかける。

「「「はっはい！！」」」

3人は返事をして、共に走りだし、
哀は黙ってそれについて行った。

「即死だな」

コナンは言う

「江戸川君。白鳥警部が来るらしいわ」
「わかった。」

哀は携帯をしまい、現場を検証している渚のもとへ駆け寄った。

「渚。」

哀は言う。

「ん？」

「あの…別に尾行けてたわけじゃないから…」

そう言って、そっぽを向く。

渚はその様子を見て、微笑み、

「あんまり突っこまないでおくよ」

そう答えた。

で、楢崎姉妹は？

放置です。

ｆｉｌｅ．３８　ツンデレガール？（後書き）

渚の身長は元太と同じくらいです。でも細見。

file.39　ツンデレガール？

「遅いね」

楢崎妹は言った。
姉は静かにうなずき、

「行ってみようか」
「え？」
「渚君たちの所に」

うん！と、妹は元気良く頷き、二人は歩き始めた…

「さて、どうやって解決する？」

コナンたちに、大いなる壁が立ちはだかった。

えぇ、そうです。いつものへっぽこたちがいないのです…

「時間はかかるが…」

誘導作戦を開始した。

「白鳥警部！」

それはそれは、可愛子ぶっちゃって…

「なにあれ、」

渚が漏らす

「得意なんですって、子供のフリ」

「え、あれが地なんじゃねぇの？」

哀と共に…

「「あはははははｈ（棒読み）」」

「うっせぇんだよお前ら！！」

耳に触るとかそう言う前に、
只バカにしているだけ。

まぁそんな事で、プライド高めな白鳥警部さんも…

「そうか、犯人は…！！」

やっと犯人を導き出せました。

file．40　ツンデレガール？

意外にあっさりお縄に付いちゃった犯人。

「…あっさりしてるなァ」

「渚。説明文（？）まで読むな」

「ヤダよ。これ愛読書なの？推理小説ばっか読んでる人とは違うの？」

「悪かったな！」

グダグダな会話文を終え

「で」

鈍感男？1　コナン少年は言った。

「何でお前らついてきたんだ？」

その問いを言い終えたとき渚は

（あー聞いちゃった。気づけよ）

そう本気で思った。

「えーっとぉ…それは…」

歩美はもごもごと言った。

「あっ、哀ちゃんが行こうって…」

「よっ吉田さん!!」

渚も気づかなかった意外な事実。

「へぇ。」

にやりと笑うドS少年は

「何でついてきたの?」

そう問い詰めるのである。

それは仲良さそうな光景で…

「コナン君!!」

「あ、楢崎さん」

一瞬忘れてた、という顔をするコナン

「あそこで待っててって、行ったじゃな…「好き!」

いやそれは、恥じる事もなく告げた思い。

「コナン君が好きなの!!」

コナン君は、赤面するどころか驚きのあまり固まっちゃってます。
警視庁の皆々様も同じく…（￣▽￣；）

「沙良!!かっ帰るよ!!もう!」

そう言って楢崎姉は、妹の腕を引いた

「何で?お姉ちゃんはまだ言ってないよ!
渚君が好きなんでしょ!?渚君に彼氏になって欲しいって言ってたじゃん!!」
「バッ!!!バカ」

そう言ってしまう沙良（妹）。

「ごっ…ごめんなさい…」

赤面し、俯く杏奈。
渚は驚くこともなく、冷静に対処。

「謝る事じゃないよ。」

その言葉に、杏奈は顔を上げた。

「でも、彼氏にはなれない。俺は今はそんな風に考えられないんだよね。」

渚は言う。

「で、ですよね…私なんて…」

「ストップ！」

その発言に。一同は目を止める。

「卑下するのはよくないよ？折角の自分の魅力が半減しちゃう。”なんて”とか使うんなら、もっといい言葉があるよね」

「え？」

「自分をもっとよく魅せられる言葉が。」

つかの間の沈黙と共に、

「わ、私…」

杏奈は口を開いた。

「私だって！いつか渚君を振り無向けせられるようになるんだから！！…行くよ沙良！！」

そう言った後、沙良の腕を引いて走り去った。

ｆｉｌｅ．４０　ツンデレガール？（後書き）

悦威「えっと、えー…なんだっけ？」

渚　「うわー…」

file.41　中身は大人

えー言い忘れていましたが、今回のメンバーは

白鳥、佐藤、高木。

家まで送って差し上げるは…

「そっか、〝私だって〟か…」

「あ、あの？佐藤さん？」

高木、佐藤ペア。

の車に乗る、歩美、光彦、元太、コナンと…

「…アイス食い逃しちゃったぁ…」

とうなだれる渚。

「あーウザい！！アイスなんかまた食べればいいでしょう！！」

「限定品だったんだよ！！」

「それアンタはもう四本だべてたじゃない！！」

「食い足りねぇンだよ！！」

と、それに食い掛かる哀。

「お前らうるさい！」

そのコナンの言葉で一同は鎮まるが

「そいや、コナン。沙良ちゃんに返事してなくない？」

そう沈黙を破る渚であった。

「今時の子はマセてる。」

白鳥はそう漏らしており、

「私だって…そうか…」

そう呟く佐藤と…

「はぁぁぁぁぁ～」

ため息が絶えない高木であった。

続く

ｆｉｌｅ．４１　中身は大人（後書き）

もうそろそろ組織を・・・・出します。

ｆｉｌｅ．４２　探す者と探される者（前書き）

組織。です。

file.42　探す者と探される者

「……」
「兄貴…」

歌声が響く、酒場。
そう、とある巻に出てきた酒場。（マティーニの時ね）

「…信じらんねぇな」

冷酷なあの男。ジンはそう吐き捨てた。
ウォッカは、そんなジンを気まずそうに見ながら、一口酒を飲む。

「ロゼがあんな簡単に死んじまうなんて」

それは、追悼とかそう言うのではなく

「シェリー同様。どこかにトンヅラこいてんだろ」

さっきから吸っていた葉巻を、灰皿に押し付けた。
只の怒り、憎しみ。

「なぁ、てめぇが隠してるなんてこたぁねぇよな」
「え?そんなわけないじゃないですか」

ジンの問いに、慌てて弁解するウォッカ。
鼻を鳴らし、「お前じゃない」そう強く言い。

「お前だ、お前！」

そう、一人のボーイの腕を引いた。

「おっお客さん…そっちのご趣味で？」

「バカ言うんじゃねぇ、ベルモット！」

慌てていたボーイは観念したかのように、面をはがした。

「…流石。私の愛するジンだわ」

そう言って、ベルモットはジンに抱き着く。

ポーカーフェイスを崩さず、そのまま同じ問いをしたが、

ベルモットは、驚きはしたがそれを否定した。

「ロゼは…生きてるでしょうね」

そう言って、長いプラチナブロンドの髪を振りほどいた。

「私が育てた。有能な殺し屋なんだから」

その青い瞳は、ジンを見つめ

「…だから、見つけても殺さないでね…」

そう哀しく訴えた。

「裏切り者は消す。それが俺たちのやり方だ。そんな情なんか捨てちまえ。」

冷たく吐き捨てた。

探す者と探される者

ｆｉｌｅ．４２　探す者と探される者（後書き）

悦威「この二人好き？」

渚　「こいつらが組めば、世界征服できそうだぜ」

哀　「いや、ウオッカが居なければどうにもならないわ」

悦威「え？何で？」

哀　「あの二人じゃ、ただの命令に聞こえてやる気申せるもの」

悦　渚「「ふっ深い！！」」

ｆｉｌｅ．４３　恐怖（前書き）

※注意※
この話はフィクションです！！！

file.43　恐怖

「俺はベルモットに育てられたんだ。」

渚は告げた。
場所は、ジュディの家。
彼は組織から命からがら逃げだし、放浪していた所をＦＢＩに拾われた。

「…両親は分かるの？」
「さぁ？」

こう誤魔化される事もあれば、

「どうして彼女がアナタを育てたの？」
「売られてた俺を、アイツが買ったの。」
「買ったって…人身売買なんてあるの？」
「昔はね」

そう簡単に話すこともある。
彼が口を閉ざすのは、自分の生い立ちについてと…

「なぜ、シェリーのもとから離れたの？何かわけがあったの？」

彼女との…

「ノーコメント」

過去…

・・・・・・

「過去についてを…話さない？」

「えぇ」

場所はカフェ。
目の前に置かれたコーヒーをすすり、
彼女の話を聞いていた。

「生い立ちと、貴方の事については…」

ジョディは頭を抱えていた。
だが、そう問われたって哀は答を知らないし…

話す気にもならない。

「大変申し訳ないけど…私、
アイツが話す気さえもないことを話す気にはなれないの。
それに、消したくなるようなエグイこともやっているしね、組織は。
」

そう言って、立ち上がる。

「コーヒー御馳走様。あとついでに一つ。
真実を知ることがすべてじゃないの。隠した方がいい真実だってあるんだから…
ま、日の光を浴びて過ごしてきたあなたには理解できないかもしれないけどね。…」

そう大人びた口調で告げ、去った。
ジョディは思はず言葉を濁した。
彼女を引き留めようとたった席にまた座り、ため息を吐く。

「凄いでしょ」

大人びた声に振り向いた。

「俺、アイツのあーいうとこに惚れたんだ」
「渚…何で？」

結わいた長い黒髪を跳ねさせながら、ジョディの前に立つ。

「話したくなったら話すよ。そんな気が起きたらだけど？」

そう微笑み、立ち去った渚。

ジョディの中に屈辱感が、廻った。

それと…

僅かの恐怖感…

file.44　誘拐

いつもの夕方
いつもの通学路

「なぁ、アイス食おうぜ!!」
「食べよ食べよ!!」
「え、買い食いはダメですよ～!!」

いつもの会話。

「あら?アナタは行かないの?渚」
「全部制覇したもん、ココの」
「…え?アレ全部?化けモンだろお前」
「失礼だぞ、江戸川少年」

キキッ

黒塗りの車が止まり

「え?」

二人の男に、

三人は連れ去られた。

「あれ…？コナン君？哀ちゃん？」
「渚もいねぇぞ…？」

黒塗りの車に…乗せられた。

クロロホルムをかがされて…

file.45 愉快犯

「えぇ、分かったわボス。」

ピッ

渚を始め三人は…
眠らされたふりをして、様子をうかがっていた。

「…楽しいわね、誘拐って」

そう鼻歌と共に告げた女に

「誘拐犯なだけに愉快犯ってか?」

渚はそう一言

「あら、ボク。起きてたの?」
「そう簡単に眠らねぇよ。そう躾たのも、お前だろ?ベルモット」

その一言と共に、残りの二人も起き上った。

「あら、流石ねロゼ。皆眠らなかったんだ」

残念と付け足し車を止めた。

「組織には伝えたのか？」

これはコナン。

「いいえ？私が見つけた獲物を、他の人に仕留められたらムカつくじゃない」

その答えに鼻で笑う渚。

「それに、シェリーだけは…」

ナイフと共に、言葉が飛ぶ。

「私が殺したいもの」

ナイフは哀の目の前で止まる。
強い、彼女の眼光と共に。

「この泥棒猫だけは許せない…」

そう発した。

「それで、何の用だ。ベルモット」

渚は言う。
ナイフを離しながら、観念したかのように告げた。

「今日は、お誘いに来たの」
「え？」
「私たちを射抜ける、銀弾（シルバーブレット）達に…」

奇妙な薄笑いと共に

「この勝負、受けてくれるかしら、ｃｏｏｌ　ｇｕｙ」

白い、手紙をコナンに渡す。
その紙には、日時と場所、そして地図が描かれていた。
宣戦布告の言葉と共に…

「これは！？」

哀が顔を上げる。
渚は絶句した。

「受けるぜ…」

コナンは言った。

「お前らのボス直々の誘いとやらにな…」

にやりと…

「いい返事をありがとう」

そう微笑んだ、ベルモット。

【８／２０　杯戸グランドビル】

そこが舞台。

「ココでいいよ」

その渚の言葉と共に、三人は車を降りた。
米花公園付近。

「ねぇ、ロゼ…」

ベルモットの呼びかけに渚は足を止めた。

「このパーティーは…実は…」
「言わなくていい。」

続けようとした言葉を止めた。

「なんとなく予想はついてるよ…取り合えずお礼でも伝えといてくれる？」

いつもの薄笑いは消え、

「アイツに」

口元の笑みと共に、そう発した。

・・・・・・・・・・

「コナン君!!」

蘭がコナンに抱き着き、

「心配させるなバーロー!!」

小五郎がそう言ってコナンを小突いた。

三人は誘拐として警視庁に捜査されていたが、未遂という事で片付いた。

「温かいな」
「え？」
渚はそう漏らした。

「探偵さんの周りは」
その言葉に、哀は少し悲しそうな笑みを浮かべ
「ホント…そうね」
そう呟く様に言った。

file.46 crime（後書き）

宿題に専念するので、更新がストップします！すみません！！

悦威カイ＞（＿＿）＜感想評価等々お待ちしております！

ｆｉｌｅ．４７　優しい世界（前書き）

メイト、らしんばんへ参上し、
沢山の「萌え」をゲット！！
明日も行きま～す。

美術部で出さなきゃいけないんですよね、絵。

久々のコ哀

file.47　優しい世界

「ふぅ」

ため息

パソコン前に向かい、作業をしていた灰原哀は盛大なため息を吐いた。
理由は…

「後遺症」

その一言が重い。

一つ、伸びをしてキッチンへ向かった。

・・・・・・・・・

ピンポーン

気の抜ける音がするが、気にしないでいただきたい。
江戸川コナンは、哀に呼び出され阿笠邸の前に来ていた。

「誰もでねぇし」

そうぼやきながら、試にドアノブに手をかけると

カチャ

開いた。

「不用心だな」

そうため息をつきながら部屋の中へと、足を踏み入れた

「入るぞー…博士ぇ、灰原〜？」

すると、目に入る、一つの姿があった。

（ったく）

彼を呼びだした主。灰原哀はソファに身を沈め寝息を立てていた。
向き合っている机には、コーヒーが入ったカップが置いてある。
湯気はなく、冷め切っている。
キャラメルのような色をしたコーヒーは、砂糖の割合のが多く見える。

コナンに幼い頃から身につけられた、紳士としてのたしなみ（？）は、彼女に付近に合ったタオルケットをかけてやった。

そして、辺りを見回すと、一つの紙切れが目に入った。

「博士は、不在か」

そう呟き、彼女が使ったままの、コーヒーメーカーを使いコーヒーを入れた。

いつの間にかタオルを握りしめ、静かに眠る哀の姿。

「黙っていりゃあ…」

向き合い座り、

「可愛いのにな」

そう感想を漏らした。

普段の姿とは反比例に、子供らしく眠る彼女

ゆらゆらと、コナンのカップから立ち込める湯気は、まるで、今の時の流れのようだった。

ｆｉｌｅ．４７　優しい世界（後書き）

宿題頑張るぞぉ…（一”一）

file.48　関係（前書き）

渚くん

ごくせん（原作）大好きだった悦威です。

file.48 関係

夜の街。
鮮やかな街灯光る、夜。
鼻歌を歌いながら歩く、少年の姿があった。

「あった。」

そう呟き、立ち止まるは…

とある、家。

【松田組】

戸を開け、

「じいさん。居る？」

そう室内に声をかけた。

・・・・・・・・・・

「おぅ、坊主。この前の事件以来だな」

そう言いながら、渚を出迎えてくれた人物。

カラオケボックスでの、殺人事件の犯人の関係者。松田組組長。

そして…

「例の事、聞きに来たのか？」

放浪していた彼を引き取った、正真正銘の人物で”黒の組織”と関与する人物。

「あぁ、そうだね。どう？裏切る気になった？」

渚は言う。

彼は黙って頷いた。

「協力するよ、ロゼ…いや、渚」

その二人のやり取りに、

他の組員たちも、覚悟を決めた顔つきになった。

file.48　関係（後書き）

もう既に、深夜の予約更新は止めました。

ｆｉｌｅ．４９　弱り続ける体（前書き）

「エヴァンゲリオン」見ましたか？
実は渚君は、エヴァから来たんですよね…（笑）
林原さん演じるレイから、緋色の瞳を。
カヲルさんから渚を。
月は使いたくて探しました。
ユエは実は後付け（笑）

file.49　弱り続ける体

『A Thank you Nagisa, inspection are the end（ありがとう渚、検査は終了よ）』

ジョディの声が室内に響く。

渚は検査服を着込みながら、目の前に現れたジョディに聞いた。

「俺の体は、持つ？」

「え？」

物憂げな緋色の瞳が語る。

「アイツの成長、見守れる位持つかなァ」

そう呟く様に。

ジョディは渚の言う（アイツ）が哀だという事を悟った。

「わからないわ。でも、このままではギリギリ。無理に近いわね」

そう答えた。

渚は、ガラスに映った己の姿を鼻で笑う。

「だよね。」

そう言って、検査のために乗っていたベットっぽいゴツイ機械から飛び降りた。

その場にいた、医師から暖かいココアを渡された。それを啜り
そして、憐れむような顔をしたジョディを見た。

「やめてよ、その顔」
「え、あっ、ごめんなさい…」
「別にいいけどさ…憐れんでも。」

渚は歳に、似合わない表情をする。
少しさみしそうな、諦めたような、そんな表情(かお)

「確かに可哀そうかもしれないしね」

そう言って、ははっと、声を立て笑った。

「所詮この体は遺伝子操作された躰。
人殺しの為に生まれたにすぎないし、本当は俺に感情(こころ)なんてなかったかもしれない。」

俯くジョディ。
渚は構わず続けた。

「俺が人を殺そうとしたのは過去に二度。一度目はジン。それと…」

また一口、ココアを啜り、告げた。

「二度目はシェリー。だから俺は会いたくなかった。」

ジョディは驚きが隠せずにいた。

「でも、会いたかった。抱きしめたかった。触れたかった…矛盾し

てるよな」

そう言った。ジョディは首を横に振る。そして「少しわかるわ」と答えた。

「私だって、シュウを探してる…ずっと…もういないのは分かってるのに」

涙を流しながら、

「でも、探さずにはいられないのよ。私は彼に逢いたい。触れたい。あなたと似たようなもの…矛盾してるのよ…」

その言葉を聞き、渚は驚愕した。だがそのことを悟ら寝ぬよう、ハンカチを手渡す。ジョディはお礼を言いそれを受け取った。

「ｒｙｅか…アイツもいい男だったしね…妖しかったけど…」

そう、少し笑った。

「アイツ、ジンとロン毛が被ってた。もう一度見たときは切ってたけど」

そう言って、すぐ切なくなる。

彼は、宮野明美と情報収集の為に交際していたのを知っている。
そして、それが原因で組織に切られたことも…
またそれをきっかけに、志保が組織を裏切ったことも…

硝子に映る、幼くなった自分の姿。

しかし変わらず、裏切りの刻印は首を伝う。

「明日…死ぬかもしれない」

そう呟く己の状況。

弱り続けるこの体。幼児化したことによってより悪化した。

「死ぬ…か」

小さくなった手。

「ジョディ」

名を呼ぶ。「何?」とハンカチを握り、返答した。

「俺の体、強い発作に耐えられる?」

その問題に

「無理よ、二回来たら確実に死ぬわ」

即答した。

決戦の日まで、

あと僅か…

ｆｉｌｅ．４９　弱り続ける体（後書き）

次回かな？決戦の回…いや次の次ですな？

よろしくお願いいたします。

ｆｉｌｅ．５０　ＧＡＭＥ！（前書き）

決戦の章スタート！！！

ちなみに個人的に、渚君の声のイメージは、遊佐浩二さんです。

誠に勝手ながら、すみませぬ。

「悪ぃな、博士。」
「いや、いいんだ。お前の話を聞いた時点でワシは、頼りになる勇者じゃからのぉ！」
「あ、そう」

博士の言葉により、コナンは感謝が薄れたがそのままパソコンを立ち上げた。

「とりあえず…俺は裏方だ」
「おぅ。指示頼むぜ」
「頼りにしてるわ」

渚、哀と続く。
いや、ユエと志保…かな？

二人は元の姿に戻った。
幼児化していることがバレない様に、コナンが元に戻らなかったのは彼、工藤新一は死んだ事になっているからだ。

この回には、組織の幹部は全員出席。もちろん…宿敵ジンも。

「あの方」の護衛に回っている。

「…渚お前…」

コナンが少し真面目に

「化けたな」

そう言った。

渚は女装。で正装している。
彼も死んだ事がバレない様…いやもうバレているだろう。
黒い、チャイナドレスに身を包んでいる。（ちなみにロング）

「女にしか見えないだろう?」
「変装術は、ベルモットに?」
「まぁ、そうだねぇ…正しくは大泥棒さんにかなァ」
「大泥棒?」
「こちらの話よ」
「…そうか」

そんな話を聞き流しながら、志保は耳に博士が発明した
発信機も内蔵させた、イヤリング型携帯電話を付けた。勿論渚も。

志保は黒に近い緋色のロングドレスだ。

「やっぱ似合うね、緋色。白い肌が良く映える」
「セクハラ罪で訴えるわよ」

そんな雑談をしながら、

「着いたぞ」

博士は言う。

彼のビートルのナンバーは、渚が付け替えた。
偽のナンバー。彼らに身元を探られないため。

「シェリーこれからお前は、前田美子(まえだみこ)俺の双子の姉だ、頼むぜ?」
「分かってるわ、貴方こそボロを出さないでね?私の妹、前田真子(まえだまこ)さん?」

二人の元の容姿とは全く違う、可愛らしい少女に変化した。
偽名を使い、煌びやかなショーの舞台へ、足を踏みいれた。

「よし、博士。例の空地へ」
「分かった。気を付けるんじゃぞ!二人とも」

博士の呼びかけに、二人は強く頷いた。

「堂々と行くんだぞ?美子。」
「分かってるわよ、私に命令しないで真子」

file.50　GAME！（後書き）

感想、評価等々お待ちしています。

file.51 START

「上手いな、このワイン」
「ホントね」

そんな二人に、

『てめぇら、ちったぁ緊張感を持てぇ！！！』

とお告げが入った。

・・・・・

「お招き有難うございます。社長」
「二人とも来てくれてありがたいよ」

大手企業社長に、志保の言葉と共に二人は頭を下げる。

「いいえ、お世話になってる社長の誕生日祝わなくてどうするんです？」

渚は言った。

穏やかな序章。
しかしそれもつかの間。

「やっやめて下さい！華子様！！」
「うるさぁぁぁぁ一ッ！！！」

執事らしき男と、白いドレスに身を包んだ女性が口論をする。

「どうしたのかしら」

志保が渚に呼びかける。

「なんか、変だな…」
「確かに…様子がおかしいわね」

そう二人が言った瞬間

「危ねぇ！！！！」

渚がそう言って、女性のもとへ駆け寄った。
それは、

彼女が大きめな窓から落ちそうになったから。

客たちは目を瞑った。

ｆｉｌｅ．５２　ｓｗｉｔｃｈ（前書き）

最初はおっちゃんだそうかなぁと思ったんですが、やめました。

静まり返った舞台。
志保は恐る恐る目を開けた。

「ゆ、真子！！」

そう言って駆け寄る。

渚がぎりぎり間に合い、女性の腰を抱き堕ちていない。
助かったかのように見えた。

「彼女は？！」

ぐったりしている、女性。

「…死んでる。」

渚は呟く様に言った。
志保は驚きながらも、脈拍を確認をする。

それは冷たく、動かない。

「嘘でしょう？」

なぜ？

落ちていないのに、

彼女は死んだのか…？

・・・・・・・

しばらくして、警察も来たが、青酸反応があり彼女は自殺という事で処理された。

渚も怪しまれはしたが、所持品に異常はなく
彼女は、覚せい剤の常習者であることも分かり
様子がおかしかったのはそのせいであろうという事になった。

しかし…

彼女は、きっと組織に殺された。

限りなく、自分たちに足がつかないように殺る

それが組織の事が表舞台に立たない理由（わけ）

彼女の死を合図に、もう既にゲームは始まっていた…

がしゃぁぁぁぁンッっ！！！！！

そんな大きな音と共に、シャンデリアが墜落しそして電気が堕ちた。

人々は引くように去っていく、場内は勿論パニック。

志保は、

「…とんだ鼠が迷い込んできやがった…」

ジンに銃口を向けられていた。

「…なぜわかったの？」

志保の問いには答えない。

「その変装、いい加減解いたらどうだ？」

重々しく告げる。

「シェリー！！」

file. 53 hunter

「待ちやがれ！！」

ジンの罵声と共に、志保は一心不乱に走る。

「助けて…」

小さく呟く様に、

「助けて、ユエ！」

「…兄貴？いませんぜ？」
「探せ」
「へぃ」

革靴が地面をける音、
全てが突き刺さるように、恐怖と身を震わす。

「大丈夫だ、シホ。落ち着け」
「…」

そう、包み込むように安らぎが広がる。
それは、別の場所に居る新一にも伝わっているようで、
息をのんだ。

「チッ！！！」

大きな音と共に、

「兄貴、ボスから回収命令が」

「五月蠅い！分かってる！」

肩が震えた。

二人の男は去った。

それは…

「見ぃーつけた」

黒い影、

「あの方」自身が彼らを見つけたから…

file.54 KEEL YOU

パァンッ

パァンッ

数発、音が鳴る

そして薬莢が転がった。

暗闇の中を走る、

生きるために…

「名探偵！ここら辺に隠れるところは！？」
『え？！』
「逃げたら身元がばれちまうかもしれないだろ！！」
コナンの助言により、避難用の梯子を伝い、屋根裏へ志保を送った。
息が上がる。
湧き上がる恐怖…
しかし、妙に脳裡は冷静である事が不思議だ。
「お前はそこから逃げろ、いいな？俺はアイツ熨してから行く」
「でも、」
「いいから」
パァンッ！！！
間髪の無い、音。
「ぐあっ」
渚が小さく悲鳴を上げた。

「ユエ！」

志保は声を上げた。

「行け！」

渚は絞るように言った。

だけど、

（足が…動かない…）

体中に、突き刺さるような恐怖。

「その表情（かお）、よぉーく似てるよ…てめぇの母親に」

「あの方」は、怪しい声とともに、高々と言った。

「殺したいほど愛した、あのクソ女（あま）になァ…」

『え…？』

思わず、その話を聞いていたコナンが声を上げた。

そして”ロゼ”は…

「実の息子を撃つなんて…とんだクソ親父だな…この野郎」

苦痛に顔を歪ませ、吐き出すように言った。

黒いドレスに、鮮血がジワジワと、撃たれた右肩から染みた…

file.54　KEEL　YOU（後書き）

コナン君目立たなくてごめんなさい。
本当にごめんなさい、凄くごめんなさい。

謝っても謝っても足りません。ごめんなさい。

なんかごめんなさい。一種のパラレルとしてお楽しみください。

file.55　DEATH（前書き）

残酷描写注意でございます。

file. 55　DEATH

「どうしたんじゃ、新一」

人気のない、裏路地に…
黄色いビートルが一台。

その中で、コナンはまるで雷に打たれたように、
恐怖と言うものに…脅えていた。

それは、阿笠博士も、初めて見る表情であった。

そして、重々しく…真実を告げた。

「渚…いやロゼは…」

その様子に、生唾を呑みこむ。

「…〝あの方〟の息子らしい…」

その答えに、

「嘘じゃろ…」

呟く様に、言った。

・・・・・・・・・・

パァンッ

その銃声に、志保は体を震わせた。

「いっ・・・たいなぁ…」

撃ったのは渚。

痛みのせいか、少し位置がそれ、
左わき腹を銃弾(たま)が通り抜けた。

そんな姿が、実の父だとしても、油断をしてはいけない。

「ガっ!!!!」

間髪入れず、その脇腹を蹴り込んだ。

血を吐く、『あの方』

渚は、悲痛に顔を歪ませたが、

パぁぁぁぁンッっ

渚が装備していた拳銃で、相手の足首を打ち抜いた。
これでもう、取り合えず歩けない。

そして走り出し、避難用の梯子に足をかけ、

「逃げるぞ!シホ」

そう言って

「名探偵！指示を！！！」

”三人”は脱出した。

file.55　DEATH（後書き）

三人目とは…？

file.56　Drag（前書き）

サッカー見ました。勝てて良かった。

「乗れ！渚！灰原！！」

コナンの気転により、会場の付近に車を止めた。

「助かったわ。工藤君」

そう言って、二人は車に乗り込んだ。

いつ戻っても大丈夫なように、タオルを被る。

しかし、

「博士、早く家に」

「え？」

「ユエは気を失っているのよ！！」

「え！？」

ぐったりと、微動だにしない。

顔色も恐ろしく悪い。

「血が止まらないの。動脈をやられたかも」

鮮やかな鮮血が、白いタオルを染めていく。

なるだけ早く、自宅へと車を急がせた。

・・・・・・・・・・・・・・・

なんとか、手当は出来た。

途中、発作を起こし子供の姿に戻った。

場所は…病院だ。

「…組織と接触した！？」

ジョディは言う

そう…ＦＢＩの元へ頼り、内密に処置を施した。

「それで渚は撃たれたというの！？」

「ええ、そうよ」
「…そんなこと言ったら渚の正体が…」
「それは大丈夫」

哀の姿となった志保は言う。

「”元の姿”の戻って、奴らに接触したから」

そう、表情を変えず告げた。
ジョディを始め、皆々は驚愕した。

・

「もともと、彼らの服用した毒薬は私が作成したの、
データはないけど、短時間効果のある解毒剤は開発できているわ。」

哀はそのまま、淡々と説明を続けた。

「それには、効果が強い分。強い発作が起きるわ。そして、副作用
もあるかもしれない」

そう発した時、ジョディは「ちょっと待って」と話を止めた。

「おかしいわ、何で…」
「え?」
「彼の体はもう、発作なんかに耐えられないはずなの」

いかにも動揺したような表情をし

「なぜ、生きているの…？」

・・・・・

その言葉に、哀は

驚きを隠せなかった。

（…嘘でしょう…）

file.56　Drag（後書き）

テストで、『被る』とでて、「かぶる」と答えました。
正解は「こうむる」でした。チーン

ｆｉｌｅ．５７　無色

それから数日…

ふと、渚の躰に異変が現れた。

「細胞が…正常に戻ってる…？」

そう伝えられた哀。

「アンタって、遺伝子操作されてて…」

「あ～うん。細胞の構造自体可笑しかったんだけど…」

「ＡＰＴＸ４８６９の作用により…正常に戻ったって事？」

その言葉に曖昧に返事をした渚。

ＡＰＴＸ４８６９は細胞の自己破壊プログラムの偶発的な作用で、
神経組織を除いた、
骨格・筋肉・内臓・体毛……それらすべての細胞が幼児化の頃まで
後退化してしまうという毒薬。
これはコミックスでも説明したとおり。

この毒薬にはＤＮＡのプログラムをを逆行させる作用があり、アポトシース現象を利用し、
細胞と細胞を結合させる。結合と言っても細胞同士の対等の結合ではない。
分裂により親細胞と子細胞に分かれるが、

子細胞がアポトシース現象を起こし親細胞に吸収される形の結合である。
そうすると細胞間でプログラムが逆行し若返ってしまう…

ちなみに、新一と志保が幼児化し生き残ったわけは、肉体の年齢にある。
17歳と言えば、第二次性徴から大人になるまでの微妙な肉体である為…
成長はある時点で止まってしまうのが普通。
しかし、APTX4869が作用し逆行させる。

「ま、詳しくは悦威が参考にした”コナンドリル”でも読んでくれるかしら?」
「こらこらこら…」

「ま、あんたの体は老化現象(テロメア)の作用とかの様子が見られなかった。」
哀は言う。

「今の姿を見ると、成長と言えば身長があった程度にしか見えないわ。」
「まぁ、大体そうだね」

淡々と告げた言葉。

「そして私たち3人の共通点は頭脳。天才と呼ばれるほどの頭脳があったわ。」

そこが作用したとも思われ、そして渚が幼児化したという事は…

「あなたの肉体はたまたま私たちと同じ、”第二次性徴途中の肉体”であった…」

「運が良かったんだな。俺」

ホントね、と呟きながら哀は…

静かに微笑んだ。

ｆｉｌｅ．５７　無色（後書き）

ジュエルペット見てます。水城花音が好きです。

重たくて申し訳ありません。

file.58　才能

まず、ＡＰＴＸ４８６９の最初の被験者となった、工藤新一
若干高校生ながら名探偵と呼ばれるほどの多彩な頭脳。
そしてサッカーの名手。

そして、第二の被験者、宮野志保
宮野博士の娘で科学的技術が極端なほどに長けていた若き天才科学者
そして、ＡＰＴＸ４８６９の開発者。

第三の被験者、ロゼ
「あの方」の血縁を継ぐ唯一の人物で、遺伝子操作で生まれた子
緋色をの瞳を持つ、天性の殺し屋。驚異の身体能力を持つ…

さて、共通点

皆、天才と呼ばれている。

「…何見てるの？」

プラチナブロンドが、跳ねる。

薄笑いを浮かべた、妖艶な女性。

「ちょっとしたデータだよ」

問いかけられた男は静かにそのデータの入ったパソコンを閉じた。

「相変わらずの秘密主義ね…」

「お前もだろう？」

そっと寄り添いあう二人、夜景に反射したガラスに映る二人の姿。

「ベルモット…」

「私はシャロンよ、ボス」

二人は見つめ合い、苦笑した。

男はそっと、甘えるようにベルモット…いやシャロンを抱き寄せる。

シャロンもそれに従ったように、男の首に腕を絡ませる。

「で？今日は何事かね？」

「晩酌でもしようかと思って…」

「…なにが呑みたい…？」

その問いに、そうねぇ…と首をかしげ、

「身も心も若返るような…秘薬かしら…？」

その答えに、男はふっと笑う。

「おかしいかしら？」

「あぁ、それ以上若返ってどうする」

その答えに、小馬鹿にしたようにシャロンは

「女扱いが上手くても、まるで女心が分かってないのね」

そう発した。

「女はね、貪欲なのよ。欲望が尽きる事はないわ…
永遠の若さも、美しさも…全て手にしたいの。
たとえ…どんなことをしても…ね」

窓ガラスに映る、今もなお変わらない若さを持った美しい女と
黒髪に東洋顔の端正な若い男…切れ長の目が良く目立つ。
ロゼとは異なった印象がある感じの男である。

「怖い女だ」
「女はみんな怖いわよ…」

そして静かに微笑し、

運ばれてきたシェリー酒を開けた。

file.59　好物（前書き）

ある日のジョディ宅

file.59 好物

そう探偵団を始め、蘭、園子ももらした。

皆々はパスタを食べ、笑顔になる。

「オカワリは自分でしろよ…特に元太。」
「渚！オカワリ！」

ある日のジョディ宅。
皆々は学校帰りに、渚を訪ねた。
怪我を理由に少し休息を取っていた彼のお見舞いの為に…

「…懐かしい味ね」
「え？なんか言った？哀ちゃん」

哀は微笑み「なんでもないわ」と答える。

渚の怪我はもう治りかけ、明日には登校出来るらしい。
パスタを作ったのは渚。
哀が懐かしそうに食べるパスタ。
それは過去に二人が暮らしていた際、よく”ユエ”が作っていたものであった。

「美味しい」

「…って言うか渚」

そんなのんびりとした空気に園子が突っ込んだ。

「炭水化物に炭水化物ってどうよ」

それもそのはず。パスタに対しサンドイッチが出される。
中身は、ブルーベリージャムにピーナッツバターを挟んだもの。

「美味しいからいいんだよ」

渚はそう言って微笑んだ。
その言葉に園子と蘭が、一つ食べてみる。

「「甘っ…」」

二人が揃って言い、光彦が「ですよね」と同意した。
さりげなくコナンはそれを見ないように、パスタを平らげ

「渚、ちょっと」

そう呼び出し

「私も行くわ」

いつの間にかパスタを食べえた哀が立ち上がり、
一つサンドイッチを掴み二人の後を追った。

その様子を遠目で見る一同と、鼻歌を歌いながらワインを開けるジ

ヨディ。

「仲いいよね、あの三人」

蘭が言った。

「そんなことない、」と歩美と光彦は言うが高校生組には三人は親密そうに見える。

特に…コナンと哀は…二人で会話している所をよく見かける。

渚についてはどこか、二人…特に哀となるだけ距離を置こうとしているようにも見えていた。

事情を察したジョディは空気を変えようと、

「サラダはどうだ?」と上機嫌に皆々に勧める。

「渚、このサンドイッチ好きなのよ。自分で大量に作って食べて…ものすごく甘党で困ってるのよ…」

ジョディはそう言い「身体に悪いわ」と続けた。

蘭と園子が愛想笑いをする中、

光彦は渚が作ったというサンドイッチを見つめたまま、どことなく不安を覚えた。

ｆｉｌｅ．５９　好物（後書き）

ＯＶＡのネタを引用。
しかしですね、私も好きですよアレｗ
あんまり関係ないですよ、好物が一緒なのは…

そう光彦君に伝えてやりたい…ｗ

file.60 狂気

夜の街
ネオンが輝く繁華街。
見たような景色を、彼は何度も見たことがあった。

「おぃ、嬢ちゃん…そんなとこに来ちゃぁいけないよぉ」
金髪で、いかにもチャラそうな若者が声をかけた。

「お友達の家に行くところなの」
悪意があるのを知っていながら、子供らしく答えた。

「一人じゃ危ないよぉ…連れて行ってあげるよ…」
怪しく笑う、男。
わさわさと男の仲間らしき輩が現れた。
（仲間か…？）
そう思うと、彼は妖艶に微笑む。

「ほらおいで、」

くっくっと、笑みをにがくつぶしながら、男は言った。
彼は、

「ごめんなさい、変な人にはついて行ってはいけないと言われてるの。」

悪意があるように、告げる。

「じゃあね、ロリコンのお兄さん」

バカにしたように言った。

すると、やはり…

（狙い通り…？）

「バカにしやがって！！このクソガキいいい

彼はそう微笑み、男に向かっていく。

そしてその数人は、しばらくして彼に助けてくれ、やめてくれとせがむほど
ぼろぼろにされた。

彼の中に眠る狂気がうずく
刻まれた狂気…殺意と言う名の…

「ヤダね、」
「ぐあぁぁぁ！！」

ボキッ

骨の折れる音が鳴る。
苦痛に歪む顔が…たまらない…

「死ね？」

ふっと、風邪を着る音が鳴る。それは彼の拳が振り下ろされる音…
殺到に集まる人々は、驚愕した。

それは彼の手が止ったのだ。
男の目の前で…

「残念」

彼は苦く言葉をつぶした後、走り去り

やがて、警官たちが現れた。誰かが通報したのか、助かった。

人々は思う。
しかし違う…彼の手を止めたのは…紛れもない…

「遅かったな、ロゼ」
「爺ちゃん、悪い悪戯してきた」

（傷つけないで）

彼女の言葉…

ｆｉｌｅ．６０　狂気（後書き）

…支離滅裂ぅ

傷害事件…

file.61 海

青い…空…
憎らしい…

・・・・・・・

「「「海だぁぁぁぁぁ！！！！！！！」」」

「おい！お前ら！！あんま遠くに行くんじゃねぇぞ！！！」

「「「はーい！！！！！」」」

海

「なーんかコナン君…」

快晴の空。

「お父さんみたいだね」

「え?!」

蘭は言った。

「蘭さん、それはあまりにも気の毒じゃないかしら?」

「え?どうして?哀ちゃん。」

「一応、お父さんという年齢ではないじゃない?」

悪意たっぷりと言うように哀は言った。

蘭は、「あ、ごめん!」とコナンに謝る。コナンは苦笑いした。

「ほぉーら蘭!早く行くよ!!せっかく博士が連れて来てくれたんだから!楽しまなきゃぁ!!」

「あ、待ってよ園子ぉ!!!」

二人は服を脱ぎ、中にあらかじめ来ていた水着になった。

着替えシーンを期待していた諸君、実に残念だったな」

「渚、誰に向かって言ってる」

「あら、探偵さんは妬いてるの?」

「決バーロー!そんなんじゃねぇよ」

「蘭ちゃんって安産型だねぇ」

ガスッッ

「痛ぇっ！！！」

コナンの足が、渚の腰にクリーンヒット。

「ばーか」

哀は着ていたパーカーを脱ぎながら、ぼそりと悪態を吐いた。

「んじゃ、俺も海に入ってくっかぁ」

「私も」

コナン、哀は言う。

「わしは、車（と荷物）をペンションに置いてくるな」

「俺も行く」

「海には入らんのか？渚君」

「泳げねーんだ」

その答えに納得したように、博士は頷き渚を車に乗せた。

「ここら辺に居るんじゃぞぉ！」

「わぁってるよ」

コナンにそう言い聞かせ、車を発進させた。

水は、清く青く。爽やかだ…

「都会にしては綺麗ね」

哀はそっと呟いた。

「渚って泳げねぇのか…意外だ」

「あら？どうして？」

「何でもかんでもできるように遺伝子を改造してんなら、何で泳ぎだけは出来ねぇのかなって…」

コナンの言葉に、そっと哀は微笑み、言った。

「人間らしいところもないと…可愛くないじゃない？」

file.61　海（後書き）

海の回。熟成してます。変な文。

file.62 怪我

「鍵です」
「ありがとう」

あっさりした会話を終え、
ロビーの椅子に体を埋める渚の元へ行った。

「１４１２号室の二つだそうじゃ」
「キッドじゃん」

その番号を聞いて、渚は笑った。

「知っとるのか？」
「有名だからね、ここに現れちゃったりして？」

そう言いながら、荷物を持つ。そして

「なんか、探偵さんと縁があるみたいだしね」

そう付け足した。
「ちょっといやじゃな」と博士は答えた。

・・・・・

ドスッ

それぞれの部屋（男子部屋、女子部屋）にそれぞれの荷物を置いた。

「…園子君の荷物が重かったのぉ」

「女の子だからねぇ…」

渚は、冷蔵庫を開け、中を見る。

「麦茶がある。飲む？」

「ありがとう…」

博士はベットに腰掛け、麦茶を一気飲みした。

荷物運びは結構きつかった。

お高いホテルとかなら手伝ってくれたりするんだろうが、

小さなホテルである為、人が走り回る。

どうやら結婚式が近々あるらしく、従業員が走り回り、人手が足りない状態であった。

「海にこだわり過ぎたみたいだねぇ…」

渚は口の中でつぶやいた。

「…そう言えば渚君泳げんと言っておったな？」

「あ、うん」

「何で海に行こうと君は希望したんじゃ？」

夏休み、海か山かという提案に渚は海を即座に選んだ。

「あー…なんか…見晴らしいいじゃん、色々と？」

「そう言う理由なのかい」

博士は言うが、なんとなく…

（哀君の為かのぉ…？）

と、ふと考えていた…

ｆｉｌｅ．６２　怪我（後書き）

この前国語の授業で「小説書こうか！！」
とか言うのがあった…
おもっくそ癖が出てましたｗ
行変えまくりｗ

どうでもいいや、もう

紙に埋まりたい。

file.63　好敵手

「おぉ～絶景だねぇ」
「ホントだぁ！すごぉい！！」

夜景に歓声を上げる二人

「子供ね、まったく」

一人、美しい容姿を持つ女性が呟いた。

「三人とも、夕飯を食べましょう。レストランがあるそうですよ」

その声と共に、部屋から駆け出した。

・・・・・・・・

「美味い」

「本当ね」

アダルト組（渚、哀）
感想を漏らした。

「…お、美味しいって…これ子山羊の脳ミソって…」

光彦は漏らし、皆々はそれに同意した。

「食わず嫌いはイケませんよぉ」

渚は言った。
並べられた本格中華。
でも旨いものは旨いのだ！！

「…上手いけど…なぁ…」

コナンはそうコメントをつけ…
（これが何の肉か聞かなきゃよかったぜ…）

「あれ？」

と、声が響く

「コナン君じゃないですか」
「はっ…白馬！…お兄さん…」

「え？誰？」

渚は聞く。

「白馬探…警視総監のご子息で、海外を中心に活動している高校生探偵…
様は、東の服部君と似たような感じね…」

哀は答えた。

「あら?キッドハンターの…」
「わぁー本当に子どもだったんだぁ〜」

正反対…といった異なった容姿を持つ二人は続けて言った。

そして…

「青子、紅子。誰がいたって?」
「あれ?快斗、トイレにでも行ってたの?」

「げ…」
「え…?」

コナンは目を見開いた。

それはまるで、

「あぁ、彼は僕のクラスメイトで…」

好敵手(ライバル)に出会った時の感触……

「マジシャン黒羽盗一の息子…黒羽快斗君だよ」

ｆｉｌｅ．６３　好敵手（後書き）

じゃんけん選抜。
才加が入ってよかったわぁ…
新曲はたぶん買うと思うｗ

file.64 Fate

二人は、言葉を無くした。

「…どうした？この二人…」

そっと、哀に耳打ちする渚。

「そうね」と一息おいて、哀は言った。

「さしずめ、運命の出会い…と言ったところかしら？」

そう言って、

ふふ、探は微笑んだ。

・・・・・・・・

「いや、まじで！今回の予告とりけせねぇかなァ」
『ダメです！今回限りのチャンスなんですぞ！そのチャンスを無駄にする気なのですか！？』

ｉｎトイレ

あのコナンの様子、視線から、
あぁ気づかれたと、にがく言葉を飲み込んだ快斗

『盗一様の死の真相が…やっと…分かるんですよ』

突き刺すように、寺井の言葉が快斗の背中にのしかかる。

――――そう、やっと…

――――やっと、終わらせられる…

――――青子に嘘を吐く必要が無くなる…

――――でも…

――――でも……

「分かってるよ、爺ちゃん。嘘。大丈夫。」

「心配しないで、俺はキッドだもん…っ…だから」

――――ばれたら…誤魔化しきれる自信がない…

「心配しなくていいよ。言ってみただけだから。」

――――そうだよ…

電話の通話ボタンを押す。小さな電子音が個室に響く。

罪悪感がない訳じゃ無い。いつも…押しつぶされそうになる…

「俺はキッド…不老不死の大怪盗…」

俺は誰だ？

正しい姿が、上手く統合されなくて…

暗闇に紛れて、分からなくなる。

「怪盗キッド…」

白いマントを掴めば、

ほら…

――――――――カッ

もう、犯罪者じゃないか…

「なぁ、俺（キッド）」

また、鏡に映る、自分に問いかける。

file.64 Fate（後書き）

詳しい話は別話で…かきます。

file.65　言霊

時は遅れて現れた、中森警部。

怪しい笑みを浮かべて…俺は…

「お待ちしていましたよ、中森警部」

ほら、微笑んだ。

それは、コナンの中で
黒羽快斗＝怪盗キッドの方程式が成り立った時で。

「キッドが…」

まるで幻聴の様に、耳に触れた言葉。

「泣いてる…」

青子の言葉に、「まさか」と紅子は呟いた。」

顔を見るが、泣いている様子はなく、いつも通りの無表情（ポーカーフェイス）

「まさか…ね…」

ゆらゆらと、言霊が罪を犯し続ける彼をあざ笑うかのように

怪しい月明かりが、彼を照らし…

小さな舞台を作り上げた…

file.66　悲痛の願い

「はっ、はっ…」

白き罪びとが駆け抜ける。

奪ったのは、真っ赤に燃えるガーネット。

「待ちやがれ！怪盗キッド！！」

発砲

「っあ！！」

見事に足を貫いた。

白い扉が、痛みに揺れる瞳に映る。
――――出口だ！！
そう、開いた瞬間。
暗闇と、紅いネオン。

屋上…

翼を奪われてしまったキッドにとっては只の…

――――――鳥籠でしかない…

「…怪盗キッド…観念しな」

押し殺すような男の声が聞こえる。

もうだめだ…そう感じ、きつく目を閉じたとき…

「…助かりたい…？」

頭の上から声が聞こえる。
甘く、囁くようにしみこむ。

きつく閉じていた瞳を開放し、顔を確認しようと目線を上げた。

「…名…探偵…？それに…」

彼と一緒に居た、少年と小さな科学者。

「助かりたい…？それともこのまま朽ち果てる…？」

名探偵の右横に立つ、少年が囁く。
先程の声は彼の物だとすぐにわかった。
甘く…俺の胸に染み込むように、染まっていく。

覗き込む、ガーネットの様に赤く、燃える瞳が問いかける…

「…白き罪人さん…？」

差し込む月明かりが、照らす。

「助けて…っ」

Wish of the poignancy

file.67　抱擁（前書き）

…詳しい話を書くと言いましたが、やっぱやめます。

申し訳ありません。ごめんなさい。

file.67 抱擁

「いてっ!!もうちょっと丁寧にやれよアホ子!!」
「これくらい我慢しなさい!バ快斗!!」

ほほえましき二人の姿に、苦笑する紅子と探。

「でもまさか、自分からカミングアウトしちゃうなんてね」
「え?何がですか?」

いまいち空気の詠めない探に「キッドの事よ」と一括する。

「まぁ、確かに意外でしたよね…僕たちがバラしちゃおうとスタンばってたんですがね」
「無駄だったみたいね。」

痛い痛いと連呼し続ける快斗に向かって、紅子は言う。

「黒羽くん、少しは私にも感謝しなさいよ…貴方の傷口塞いで上げたのは私なんだから」
「へーへー、ありがとうございます。紅子様。」

「ったく…」

そう呟きながらも…

「…無事でよかった…とでもいうような顔ですね」

「…うるさいわよ、白馬君?」

心を落ち着かせた。

「残るカミングアウトは、コナン君だけですね。どうするんでしょう」

「愚問よ白馬君。気長に待ちましょう?」

「快斗、コナンの新刊読む?」

「読む―!いつもサンキュー!」

このように、怪盗キッドは、工藤新一の正体を知ったという…

「なんてね。」

そう呟き、にやりと快斗は笑った。

file.68　吉報？

「…え？」

と哀は聞き返した。

ある日の阿笠邸

「じゃからのぉ…」

博士は、のんびりとした声で状況を説明した。

・・・・・・

「え…ジョディ、いまなんて…？」

「強制帰国よ…これ以上調べるなの一言で…」

それは突然の事で…
大統領からの令…逆らうことは出来なかった。

「何でいきなり…？」
「さぁ…よく分からないわ…」
「って言うか！！」

ジョディ宅。

渚はスプーンを加えたまま
荷造りをするジョディに言った。

「俺どうなるの！パスポートないし！ココから離れる気だってないのに！！」
「それは…」

ジョディは微笑みながら…

言った。

「阿笠博士の所へ行くのよ。話はついてるから?」

・・・・・・

「住むって…ここに?」

「そうじゃよ」

「そうじゃよって!あいつは…!!」

過去に…それなりの関係であり…

そのことはジョディは知らない。

私が幼児化したのは知らないのだから…しかし博士は・・・・

「ほぼ毎日顔合わせておるんだし、大丈夫じゃろ?」

能天気に

「半日が一日に変わるだけなんじゃからのぉ」

そう放った。

ｆｉｌｅ．６８　吉報？（後書き）

同居生活始まりです。
ＦＢＩは帰国しました。

ｆｉｌｅ．６９　紅（前書き）

「アルコールが好きだねぇｂｙ林原」

哀ちゃんがお酒を飲まないのはあり得ないと思っています。

file.69 紅

「……」
「……」

無言。

「渚をよろしくね、哀ちゃん」

ジョディはそう言って微笑んだ。

・・・・・

「へぇ、大変だな」

阿笠邸にやってきたコナンは言った。

「思ったより…険悪でな…」
「ずっとあぁなの？」

博士、コナンの視線の先には
無言でテレビを見る渚と、コーヒーを啜りながら資料を見る哀。

「なんか、言ってくれんかの？」
「厭」
「そこを何とか…」
「怖ぇよ。」

そうコナンが言うと、博士は重いため息とともに肩を落とした。

「…まぁ…もともとの相性とかはいい様な気もするし…」

――――自信はないが

「なるようになるんじゃねぇの・・・・？」

自信無さげだが、はっきりと言った。

ｆｉｌｅ．６９　紅（後書き）

…ひき逃げ事件

無意識に組み込んでしまいそうな自分が怖い。

心理学なんかハマらなければよかった。

感想、評価等々お待ちしております。

file.70　悪夢

――――――――――しばらく見てなかったのにな…

飛び起きた…といった感じではない。

「落ち着け…」

優しく自分に言い聞かせ、
情けなく震える己の方を優しく抱きしめる。

「大丈夫だ…大丈夫」

深夜零時

それが彼……の目覚めた時刻であった。

高鳴る動機を落ち着かせ、また自分の先程まで寝ていたソファへと身を沈めた。
ベットではなかなか寝付けないという理由で、ソファと毛布を借り、そこで彼は寝ていた。
そんなのは只の後付で、急な話だったため、自分の寝床は自分で確保しろと言った状態。
それだけなら別にどうってことはないのだが

『哀ちゃんと一緒に寝ればいいじゃない』

ジョディはそう言おうとしたのを全力で黙らせた。

――――――気が引ける

それに、彼女も嫌がるであろう。

背中にぐっしょりと染みる冷や汗

脅えて、瞳を閉じる事を何故か自分が許さなかった。

――――悪夢――――

彼女(シホ)と再会を果たし、どこか安心したのか

過去、頻繁に見た悪夢を見る事はなくなっていた。

幼い頃の、掠れた記憶

消してそれは淡く、優しくない。

まずは雑音(ノイズ)。それが彼の聴覚の大半を支配する。

広がる紅と黒の屍　歪んだ口元　むせ返るようなきつい香水と、化粧品の香り

血の匂い

もがく、哀れな肢体

それと…泣き顔

それぞれがフラッシュバックし、最後に

――――――逃ゲル事ハ許サナイ――――――

そう白く浮かび上がり、目覚める。

何故…また…？

また鼓動が高鳴り始める

何だか…

――――嫌ナ予感ガスル…

気の所為であって欲しいけど。

ｆｉｌｅ．７１　安堵（前書き）

誤字、脱字があると報告を受けました。

見つけましたら、報告願います。

「何話のどこら辺～…」など…ご協力よろしくお願いいたします。

ｆｉｌｅ．７１　安堵

――――――眠れない

そんな自分に

「喉が渇いた」

自分以外起きているはずないのに、そう言った。

＊＊＊＊＊

扉を開け、リビングに入る。

勿論。そこでは彼…ユエがソファの上で静かに寝息を立てていた。

そっと、小さくなった背中を見て…ふと、笑みがこぼれた。

静かに歩み寄り、ずり落ちている毛布を掛けてやろうと手を伸ばした

「シホ…？」

毛布に触れた時、背中から彼の声が通る。

一つ、息を吐いた後「起きてたの」と告げた。

そして、手をすっと引き寄せた時
優しく、右手を掴まれた。

「何？」

そう問いかけると、柔らかな声で

「本気で嫌われたのかと思ってたけど…そう言うわけじゃないみたいだね」

意外だった。

確かにまた、同じ屋根の下で暮らすことは気が向かなかったが
話しかけても来ないし…だからただ、黙っていただけで…

――――そう…思ったんだ。

「バカみたい」

そう呟き、声を上げて笑った。
自分でも驚くくらいの笑顔で。

「笑うなよ」

と、不満げにユエはこちらに向きなおし、言った。
私は、そのまま床に腰掛ける。

それは、

もうちょっと話していたい。と言う私が、自然に動いていたのだ。

「やっぱ…お前といると落ち着く」
「え？」
「なんか…安心すんだよ。何でだろ」

そう言って、私の手を握りしめたユエ。

――――私も同じよ

そう、心の中で答えた。

一人でいるときよりも、自分でいられる。

笑ったり、怒ったり…

素直になれる

「さっき怖い夢見てさ」

そう言った彼を、小馬鹿にするように「どんな？」と私は問う。

「博士が巨大化する夢」

「なによ、それ」

「笑うなって、マジで怖かったんだから」

「あはははははっ」

手を握られたまま、笑う。

「お前は見てないから分かんねぇンだよ」

「分かるわけないじゃない。

私にはデフォルメされた博士が暴れてる所しか想像できないもの」

「するなよ、デフォルメに」

また、笑ってしまう。

「笑いすぎだっ」とユエは言ったが、

そんな夢を見ましたとわざわざ報告するユエが可笑しくて、仕方が

ない。

しばらく笑っていると、我慢を切らした彼が

「あー！！！もうっっ！！」

そう、私の笑いをシャウトする。

「お前の所為で、俺バカみたいになってきた。もう寝る」

そう、我侭を言う子供のように言った。

「…そう、おやすみ」と私は言うが

「手ぇ、離してよ」

以前として手は握られたままで

「やっぱちょっと怖ぇんだよ…だからさ、」

ちょっとためらうように、息を詰まらせる。

「俺が寝付く…そこに居てよ」

甘えるように、しかしそっけなく言った。

それもまた可笑しくて、小さく、くすくすっと笑った後

「仕方ないわね」

そう…微笑んで。

翌朝、気が付いたらそのまま寝てしまっていた。

ｆｉｌｅ．７１　安堵（後書き）

感想、評価等々お待ちしております。

そして多分もうそろそろ終わりそうです。

file.72　欠員

「朝までお手手つないでねぇ～」
「お手っ！？」

赤面する哀

「博士から聞いたぜぇ～？」

にやにやと笑いながら愛をからかい始めるコナン。
我慢しきれなくなった哀は

「いだっ！！！」

思いっきりコナンの頭をひっぱたき

「五月蠅いわよ！！！」

「そう言えば、渚君。今日お休みなの？」

歩美は問う

「アイツは昨日から博士ん居候に住んでんだよ」

「え！何ですかそれ！！！初耳なんですけどぉぉぉぉぉ！？」

コナンの答えに、光彦は言った。

「何で黙ってたんですか灰原さん！なんか変な事とかされてないですよねぇ！！」

光彦は哀に言う。

哀はよく分からなくて目を瞬かせ、そして笑みがこぼれた。

「何も…？大丈夫よ」

くすくすと微笑む哀の横で「添い寝の件はスルーか」と呟いていた。

が

「厨ニ臭いこと言って起きないとごねたからおいてきたのよ。」

「…え？ちゅう…？」

光彦は何を言っているのが理解できず（歩美と元太もだが）

首をかしげていた。

「気が向いたら来るんじゃない？」

哀のそっけない答に

「そう言ってきた試あったか…？アイツ…」

コナンが質問をぶつけたが、誰も答える事はなかった…が…

ｆｉｌｅ．７２　欠員（後書き）

コナン君に恨みがあるわけではありません！

（新一にはあるけど）

だから
ウチの新一君は常にこんな扱いです。

完結設定　まだ続きます。

file. 73　黒服の男

ゆるりとした日差しが照りつける

少し肌寒い冬の空…お天道様はもう真上にある。

「おはよぉ」

ソファから、寝なおすと哀のベットを借りて就寝していた渚。

「もうおはようの時間じゃないぞ、渚君」

「んー」

長い黒髪を振り払いながら、眠気眼を擦る。

「学校に行きなさい。まだ給食には間に合うからのぉ」

博士ののんびりとした声が「学校」と発したところで…

「おやすみ」

「渚君」

部屋へ戻ろうとした渚をとっ捕まえ、博士は言った。

「ジョディ先生に頼まれとるんじゃよ、渚君を学校に連れて行けって」

「ジョディが！？」
「何でそう学校に行きたがらないんじゃ！！！！」

渚は、特にこれといった理由がなく、ただ眠いからと言うだけなのだが

「俺ね～…昔学校でいじめられたことがあって…それ以来怖くってさ…
子の紅い目で散々からかわれたし…」

そう渚が言ったところで、「そうか」と博士は頷くが

「君の情報は大体哀君から聞いとるんじゃ…学校に行った事はなかったらしいが…？」
「ギクッ」
「哀君は怒ると怖いんじゃがのぉ…」
「あー…えー…っと…」

言い訳を模索していた所で…

――――――――RRRRRR

タイミングよく携帯が鳴り

「あ、電話だから、博士」

さりげなくそう放ち、助かったと呟いてから通話ボタンを押したが

『…ユエ？』
「でなきゃよかった」

相手は…その…

『なんですって?』

「いや、何?志保」

宮野志保…いや、灰原哀であった。

『学校来なさい』

「何?突然」

『あんたがいないと決まらないことがあるのよ』

「え?」

『だから来て…』

吐き出すように、志保は言った。

ふーんと答えながら、渚はいたずらに微笑み、言う。

「じゃ、お願いって言ってよ」

『は?』

「したら行ってあげるから」

奥の方から舌打ちが聞こえ、

『お願い。』

可愛く、ため息に交じりに言うのかな？とか期待した皆様ごめんなさい

さらりと、棒読みで言われてしまいました。

＊＊＊＊＊＊

「はぁ～」

ため息が空に消える。

行くと言ったからには仕方なく、行く。

「もうヤダなぁ～」

そう呟きながら、車が掠れるように過ぎていく横断歩道を見据えた。

「ロゼ様」

背後から、低い声音が背中をなぞるように、

コードネームを呼んだ。

「お前は…」

黒服に身を包んだ男性が、紳士的に頭を下げ

「今日はお話があってきました」

そう、言い放った・・・・

ｆｉｌｅ．７３　黒服の男（後書き）

長くてすみませんです。

file.74　約束

「ユエ！！！！」

帰るなり、哀はその名を呼んだ。

階段を駆け下り、地下へ行く

「何で来なかったの！？」

勢いよくドアを開けると、珍しく机に向かい…しかし俯いていてこちらを見ようとしなかった。

地下の…冷たい空気。

何故か、哀は押し黙った。

ふと…渚が泣いていたような…そんな気がしたのだ。

「…ゴメンね、シホ。行かなくて・・・・」

ユエの口から、謝罪の言葉が告げられる。

「急に用事が入っちゃって…あ、言い訳だよね。これ。」

ただ、何も言えないままでいる哀にもう一度、

「ゴメンナサイ」

謝罪の言葉を告げた。

哀は俯き、

「もう、いいよ。こっちこそゴメン。」

そう、推し堪えた何かを吐き出すように言った。

「悪かったわ」

そう言って、重い扉のドアノブを、勢いよく回した。

file.74　約束（後書き）

短くて済みません

file.75　指切り

運命

それは誰にも…変える事が出来ない…

どんな天才たちが口々に言い争っても、答えは…ひとつ

迷い、選んだ道を進んでも

それはもともと決まっていたようなもので…

後悔さえも、しても無駄だ

振り向くことは出来るけど…

……歩み直すことは出来ない

＊＊＊＊

真夜中

「どこ行くの？」

大人びた声が、この耳を突き抜けた。

「あ…シホ…」

「こんな真夜中にお出かけとは…貴方、」

ため息交じりに続けられる。

「自分の立場が分かっているの？」

そう、言ったところで「何事じゃ？」と博士が起きだした。

「人が死んだんだよ…」

「え？」

「俺の友人だ」

「ユエ！！」

大人しい少女が、声を荒げた。

「貴方、死にたいの！？
その友人って組織の関係者でしょう？そんな状態で言って、なんになるの！」

一つ息を置き

「ただ…」

囁くように言った。

「死ぬだけよ」

――――そんなの分かっている。

「でも御通夜だから、いかねぇと」
「何度も言わせないで、あ…

「死んだっていい！！！！」

言葉を遮った。

「俺の恩人なんだよ。この言葉も、知識も…あの爺さんがくれたんだよ…」

頬を、生温かい雫が伝う

「まだ言ってねぇンだよ、何も！言えてねぇンだよ！！だからせめて！！！」

「ユエ」

思わず、捕まれた手を、振り払ってしまう。

「あ…っ…」

彼女は哀しそうに俯き「ちょっと待ってて」と言った。

数分後、彼女から一つ、カプセルを渡された。

「解毒剤よ。」

「そんなの分かるよ、飲んで出れば俺の正体はばれねぇかもしれねぇもんな」

「そうよ。」

「俺になんか使うんなら、新一にやれよ！」

「それは工藤君には弱すぎて聞かないと思うの」

そっと「だからよ、」そう頷いた。

「…あ…シホ…」

「なに…？」

のばそうとした腕を、押さえつけるように自分の頭へともってきたら

「行ってくる」

彼は夜道を駆け出した。

＊＊＊＊

松田組組長（まつだぐみくみちょう）　松田（まつだ）　仁（じん）

享年八十八　急性くも膜下出血により死亡

「情に厚く　酒と女が好きで、今期は逃したが
天涯孤独であった若頭を、養子に迎えていたおかげで…」

「世継ぎ入るんだ…残念。組織（ウチ）の人間でも贈ろうと思っていたのに

な…」

「でも、よくロゼが出入りしていたそうよ」

「そんなの関係ないね。」

「自分の息子なのに？」

「あぁ、アイツには嫌われてるから」

その言葉に、微笑する。

「葬式には行けないのか？ベルモット…」

その問いに

「当たり前じゃない。裏切り者のエロじじぃなんかに…」

「I do not put up an incense stick even if I die」
（たとえ私が死んでも、線香なんかあげてやるものですか）

file.76　謝礼

「ねぇ、爺ちゃん」
「ん？」
「何でベルモットは俺を置いてっちゃったの？」
「仕事があるからだよ」
「ねぇ爺ちゃん」
「今度はなんだ？」

「俺、迷惑じゃない？」

優しさに飢えていた、孤独な幼心には

「そんな訳無い。」

そう言って、クシャリと笑った爺さんの笑顔、

温かく大きな手は
酷く…心にしみた。

「眠ってるみたいだろ、」
「あぁ…ホント」

目を細めて、爺さんの死に顔を見る。
つい、昨日の事だ。

登校中、俺を呼びとめたのはコイツ…

爺さんの養子でもある若頭、松田（マツダ）　行（ユキ）

ホンの昨夜の事だったらしく、

「あっという間だった。ホント」

行は、そう漏らす。

もう、俺が行った時は意識がなくて…

細い管が、いくつもつながれていた。

病院嫌いの爺さんは、どんな怪我をしても…大病を患っても自宅療養。

「最後まで頑固な爺さんだな。線香がい言ったのも、爺さんだろ」

「ああ、おかげで匂いがきつくてよぉ…」

「鼻曲がりそうだよな」

身内だけの通夜。

告別式とかいろいろやるそうだが、やはり俺は追われる身…

ヘタに歩き回れない。

「そんじゃこの辺で」

「おぅ、気ィ付けろよ。」

行は、寂しそうに微笑み、俺の背中を押す。
俺のガキの頃を知る、唯一の若者だ。

「生きてたら、また線香をあげに来てやんよ」

ゆっくりと、

広い部屋を出る。

縁側に座って、話していた事を想い出す。

――――迷惑なんかじゃねぇ、いっそならうちの子になるか？――――

「爺さん」

――――お前見てぇないい子、ケツの穴に入れても痛くねぇンだぞ

――――

「ありがとう」

最後に

「巻き込んで…ゴメン」

file.76　謝礼（後書き）

ケツの穴じゃなくて、鼻の穴だよな…

受けを狙ったのか？爺さん…

謎が多い、松田の爺さん。

ご冥福をお祈りいたします。

ｆｉｌｅ．７７　言い訳（前書き）

「わかってるよ、幼馴染」ＦＡＳＴ鏡音レンかわいすぎる名曲。

「正解だよ名探偵」の辺りの後のお話です。。

file.77　言い訳

「逢いに来たって…？」

…また…惑わされる。

「聞いてたの…？」

「ええ…話してほしいの」

捕らわれていることに気づかない。

「貴方がどうして…」

気づかない…

「私の元を去ったのか…」

いいえ、

気が付かないふりをしているの。

＊＊

「遅いな…アイツ」

暖炉の熱を浴びながら、うたたねこいていた日の事。
寒い日で…たぶん、志保は買い物だろう。

「迎えにでも行こうかな…」

「あーでも道わかんねぇや」

独り言
自問自答を繰り返す。

そして数分後

――――――――――――――カチャ

悪魔が足を…踏み入れた。

file.78　聖典

――――おかえり、シホ

悪魔は、そんな事さえいうのを許さなかった。

「…なぜ俺が、わざわざこんな所にいるのか…分かるか？」

「ジン・・・」

彼の呼び名（コードネーム）を口の中でつぶやく。

「見当たらねぇと思ったら…こんなとっころで油を売っていたのか」

「女のところを転々としてるのはいつもの事だろう…」

冷ややかな眼光と共に、小刀がこちらを向いた。

「ふざけるな、相手が悪い。」

「おっかねぇな、お前」

寒さが増した。

「そうだよな、あんたのお気に入りだったな。あいつ」

一人でぺらぺらとしゃべり続ける。

「仕返し見てぇなもんかな、俺の家もアンタが燃やしたし…
でもこいつは関係ないよ、俺が勝手に転がり込んでるだけで…」

無駄な命乞いだ

「関係な

「黙れ」

どすの利いた低い声が、響く

「あの方直々の命令だ。」

見下ろす瞳が鋭くて、

俺の体は恐怖に溺れる。

「そこから退け…お前ら二人は処刑だ」

状況を飲み込むのに、いささか時間がかかった。

「処刑って…アイツは！！」

目の前が、白く円にかすむ。

「っあ…」

そして、己の体が、真一文字に傷つけられていたことを知る。

片膝をついたところで、
血が滲み、溢れだす。

「来い」

その一言と共に、俺はその場を去ったのだ。

「お前を守ったつもりだった」

俺が傷つけば、それでいい。

お前は無事でいられるだろう。

でも甘かった。

お前を傷つけたのは…

「アイツを傷つけたのは俺なんだよ」

「アイツを黒く染めたのは…俺だ…」

file.78　聖典（後書き）

処刑！？

ｆｉｌｅ．７９　曇天（前書き）

「パフェマヨリョシカ」スゲー笑える。

突然の場面展開いいいい

file.79　曇天

久しぶりに会った彼女は…

酷く…荒んで見えた。

変わったのは…

環境のおかげだろうか…

そう、思いたい。

人を信じれなくなった彼女は…もう見たくない。

「おはよう。シホ」

早朝。

「おはよう。…早いのね…何かあった？」

「気分だよ。ただの」

椅子に座ると、砂糖だけは言ったコーヒーが出てくる。

そして、朝食のいい匂いが鼻をくすぐる。

「懐かしい」

漏らすようにつぶやいた。

「昔みたいだろ。懐かしい？」

「ええ。」

私の返答に微笑むユエが、そっと、昨夜の夢の続きの様で。

それが、真実であったのならば

あの時の私は…ヒトになれていたのだろうか…

「ねぇユエ」

「何」

そう言ったところで言葉を紡ぐ。

――――私の元を去ったわけ…

――――真実なのよね…

file.79　曇天（後書き）

あたまがおかｓ

file.80　混沌

「救いたい…？」

いや、違う…

「手に入れたい…」

そんなくだらなすぎる欲望が、お前を…
何度も傷つけている。

＊＊

「ばいばい！哀ちゃん」
「じゃーなー！」

「また明日」

いつもの下校途中。

全ての歯車が…動き出した。

「え…っ」

目の前に、黒い車が止まり
恐怖が、突き刺さる。

ドクン…っ
と胸が鳴り

強い気配を感じるが、身体が動かない。

そして…

「むぐっ！！」

透き通るような香りが鼻孔を塞ぎ…
気を失った。

「ボス。こちら…どうします？」

「乗せろ。しかし丁重にな」

黒髪の長身の男が微笑む。

「大事な客人を招くための…人質（エサ）なのだから…？」

file.80　混沌（後書き）

どうやら正体は気づかれていたようで…

あれ…なぜ？

file.81　存在

灰原哀が帰ってこない事。

それは皆を騒がせていた。

「哀君が帰ってこないなんて！！」

「落ち着け博士。」

DBバッチのセンサーは、灰原の分は反応がない。

博士の家にもないらしくこれは壊されたという事…

「博士…渚は…？」

「え…」

「アイツはどこに行ったんだ！？」

こんな事態なら一番に走り回りそうなアイツが、不在。

「昼から…出かけていて…電話は置いてったようで連絡が取れんのじゃ」

「バッチは、まだ出来てなかったのか」

「スマン。新一…！」

必死で謝る博士。

「クソッ！！！」

無意味に動き回れない。
それは俺の本能が組織をちらつかせるからで…

「こんな時に…アイツはどこに行ったんだ！！！」

消え入りそうな声とともに、俺は頭を抱えた。

正直…お手上げに近かったんだ

ｆｉｌｅ．８１　存在（後書き）

警察は…？

言え、それは組織が係わっていたら逆に…なので。

さて、あの放蕩息子はどこへ…？

実はあの人と言っ所に居るのです。ｗ

file.82　肉親（前書き）

ナギーの肉親は、組織のボスだけ…

正直微妙な話ですよねｗ

file.82　肉親

「あーやっべ。もう真っ暗ジャン」
「おい、イントネーションが可笑しくねぇか?酒飲んでねぇくせに」
「香水に酔ったんダヨ」
「お前が連れてきたんだろ?女の子たちは」

夜の繁華街に↑また?
二つの影。

犯人は。小五郎と…渚。

友人と飲みに来た小五郎と、女の子を連れてやってきた渚。
何故連れが女性かというと…なんか誘われたんだ~とか…

そしてどんちゃん騒ぎした結果、これだ。

――怒るだろうなー志保…

携帯　(おっちゃんの)の時刻を見ながら苦笑いを浮かべる。

「え?行方不明!?」

小五郎が突然、声を上げた。

「博士のとこのガキが！？」

「おっちゃん！電話借して！！」

小五郎から電話を奪い取ると、相手は蘭で、

『渚君！？』

「どういうこと！なんであいつが！？」

分からないのよ…と不安そうな声を蘭は発した。

「コナンは！？アイツは…」

しかし…言葉をつづけなかった。

「どうした？お前…」

小五郎は口を開けた。

渚は電話を切ると、小五郎のズボンを掴む。

思わず、目の前に立つ男と…渚のかをを見比べた。

「おめぇ…こいつは…」

顔はあまり似てないのだが…雰囲気が良く似ていて…

「俺の…」

黒塗りの車が数台。
黒服の、町の雰囲気には不似合いなスーツ姿の男を筆頭に数人の黒服の男が拳銃を構え、二人を囲む。
渚は吐き出すよう…眉を歪ませ、言った。
「実の父親だよ」

file.82　肉親（後書き）

次話。ユエの秘密と…

組織の正体が明かされる…！！

file.83　黒服

「ロゼ」

男がそう発した途端。
ユエの肩が震えた。

「何の用だ…」

必死に冷静を保とうとするのが見てうかがえる。
小五郎は困惑していた。ただものじゃない雰囲気と。

目の前に立つ男…

それは大手会社の社長…
「ロゼ」とはワインの事…

「志保(アイツ)をどこにやった！」
「アイツとは…」

男は考える様子を見せた後、

「シェリーの事かい？」

――また酒の名前…？

男は、よく新聞などもにぎわせる、社長
若さで会社を持ち上げ、しかし裏社会とのつながりを囁かれる。
――――それがこれか？

「あの子なら、眠っているよ…まだね。」

静かな微笑みと共に言った

「組織の裏切り。裏切り者は抹殺されるんだったよね。
あの子はどうなるかな。始末は全て「ジン」に頼もうと思っているんだが…」

パン

乾いた音と、
苦痛に歪む顔
滴る鮮血

「渚！！」

もう、理解不能だった。

今、ジンと言う言葉が男の口から飛び出したのと共に、

渚(ユエ)が動き出した。
そして、銃で撃たれた。
「よくやった。助かったよ。」
礼を一つすると、小五郎を見据え、言った。

「元…刑事さんなんですってね。眠りの小五郎さん」
「…それがなんだ」
驚きはしたが、そっけなく答え。
渚あの掌の傷口を止血するため、ハンカチを当てる
「そんな”殺人鬼”を助けちゃうんですか?」
「…え?」

――――今何と言った?

「やめろ!!やめてくれ!!!」
必死に叫ぶ渚の声は無意味

「世界的指名手配犯「記憶泥棒」は、彼なんですよ」
「違う!おっちゃん!!!違う!!!」
「偽りの姿を借り、平然と過ごしているようだけど…」
「おっちゃん!俺は!!!」

男は、間髪入れず
「自分の息子」を蹴りあげた。

「また嘘を吐くのかぃ？ロゼ…その緋色の瞳が、何よりの証拠だろう…？」

傷ついた、渚の顔を見て、唖然とした

月明かりに、照らされた瞳が片方。緋色に染まっている。

「っ…」

袖で、顔を隠すようにおおる。

「カラコンと言うもので隠していたようだね。バカな奴。それはお前の誇りだと何度言えばわかる」
「誇りなわけあるか！！！」
「お前は身も心も深紅に染まる…」
「やめろ！」
「お前は…犯罪者なんだよ！！」

弄ぶ様に、くすくすと
蹲る渚を見据え声を上げて笑い出した。

――――狂ってる

「あははっ…そうだ。忘れるところだった…」

笑いを止め、告げる。

「本題だよ。また俺をバカにするムカつく奴がいるんだ」

「俺はもう”殺シ”はしない」

「協力してくれないなら、シェリーの命はないよ」

「！！」

――――やっていることが子供だ

自分の私欲で、殺人を指示し…

命令を聞かないなら大事なものを奪う…

「只、お前が組織に復帰をすれば…あの子は見逃してあげるよ…」

世間を知らない、ただの我儘な子供のように…

「それは本当だな。俺がお前の命令を聞けば、志保には手を出さないんだな！？」

「そうだよ。簡単だろ？」

「渚！！」

ゆっくりと立ち上がる、彼の背中に声をかける。

静かに振り向く横顔が…大人びて見え、

「名探偵に伝えて…」

「は…？」

「ゲーム…」

静かに微笑み

「ｇａｍｅｏｖｅｒ」

（ゲームはもう終わりだ）

file.84　ウソツキ（前書き）

鏡は自分の姿を鮮明に映してくれます。
だから私は鏡が嫌いです。
逃げてるだけですね。

file.84　ウソツキ

「おかえりお父さん。あの大変なの、」

蘭の声さえも聞こえていないかのように、真っ直ぐ

「コナン」

確実に向かって行った。

「お前は知っているか…？」

「え…？」

肩を強く掴まれ、わずかばかりの痛みが走る。

「アイツは…渚は何者なんだよ…」

「え…？」

「記憶泥棒ってなんだよ!!アイツは殺人鬼なのか!?渚は…」

もう、混乱していた。

どんどん走り去っていく答えが、

常識を突き破ってゆく。

「名探偵ってなんだ…？誰だ？俺じゃない…」

独り言のように小五郎は呟いた。

「…おっちゃん。その名探偵に渚はなんて…？」

コナンは、そっと問いかけた。

「ゲームオーバー…」

生唾を飲み込み、続ける。

「そう言って、アイツの親父って言うやつについて行った」

――――なんだと…！？

「もう…訳分かんねぇ…」

そのまま、小五郎は気を失った。

汗を見ると、走って帰宅した。

酒が回ったのだろう。

「お父さん…」

蘭は倒れた実父に駆け寄り、介抱する。

考え込むコナンに向かって、

「ねぇ、新一」

確かにそう発した。

「どういう意味なの…？終わりって…？」

「終わりじゃねぇ…」

「始まりだ…」

ｆｉｌｅ．８４　ウソツキ（後書き）

短編で、この内側の話を～

file.85　刺青（前書き）

ダダダダーン！！！
アクセス数が沢山！！超嬉しいです！
皆様ありがとうございます。
あと少し渚君にお付き合いをお願いいたします！

file.85　刺青

「灰原！！」

もう…よく分からない。
私は白いシャツを着て…私の姿を見て青い顔をした貴方。
それもそうね。だってもう傷だらけ。
ほんの半日ほど…貴方を目指して歩き続けた。
あの時のように…

「工藤君」

確かにその名前を口にし、
貴方の胸の中で、震える手を押さえながら…

「ユエは…組織の元へ戻ったわ…」
「あぁ…」
「そして…私の罪も背負って死ぬつもりよ…でも、もう無駄…」

すっと瞼が堕ちてくる…

「私も…貴方も…」

渇いたのどを潤そうと、グッと生唾を飲み込み。
末路を口遊むように言った。

＊＊＊＊

「何故シェリーを逃がした…」
「あの方からの指示だ。」

暗い倉庫に染み堕ちる…紅い血痕
それは彼女の血で…

「ロゼ」

冷たい、視線を背中に感じる。

「お前の首を取るのは俺だ」

「そうなの…？」

遊ぶように、微笑を浮かべて問い返す。

「あの方の指示だ…」

長い銀髪を靡かせ、背を向いた。

死ぬのは分かっていた…いや此処には死にに来たようなもの…

只…志保（アイツ）だけ…

生き延びてくれればそれでいい。

file.85　刺青（後書き）

後半は、ジンとロゼ。

分かり難くてすみません。

クソゥ…文才が欲しい！

file.86　泣き虫（前書き）

こんな感じのが好きです。

「灰原」

そう、彼に名前を呼ばれ、私は驚きの真実を知る。
それは…私には真実が二つあるのではないか…と疑い始めた頃の事で

「あら、何かしら…名探偵さん」

「大事な…話なんだ」

だから？
彼の行動は軽率だと感じた。
それは今思うと…ユエが組織へ戻ったことから…
私の精神状態が異常だったから、ああいえたのかもしれない。

「蘭に、俺の正体が気づかれた。だから…話した。」

彼なりの決意を、受け止められる器は…私にはなかった。

――――ぱぁん

乾いた音が響く

痛みに彼は歯を食いしばった。
うっすら、目じりには涙が浮かぶ。
それもそのはず、彼の頬が赤くなるほど…
私は思いっきり彼をはたいたのだ。

「貴方に…前に一度説明したわよね…私達の敵がどんな奴らか」
「ああ」
「なら何でそんな事が出来るのっ!!」

失いたくなかった。もう…二度と…

「アイツに嘘を隠し通すのはもう限界だった！」

「吐き出せば、貴方は楽になれるわ、でもそんな行動が、大切な彼女を…

蘭さんを命の危機にさらせいたのよ」

バシッ

彼の手が、私の頭に乗る

「バーロー。仕返しだ。」

僅かな痛みはあるのかないのか…でも彼の手が優しいのは分かった。

「蘭(あいつ)を殺(や)らせなんか死ねぇよ。」

私は彼が好きだった。

蘭さんを思う、直向きな思いと…自信家で

私にはない…凄く…無謀だけど、前向きな考えをするところが。

「蘭は俺が守る。絶対…渚(アイツ)も、お前も…オッチャンも…

何としてでも守って見せるからよ」

「ふふっ…っふ…」

愉快にさせられる。

笑いがこみあげてきて。

「ねぇ、工藤君。私…凄く弱いとこ見せるわ、
でも何もしないで、そこに居て…」
「え…？」
「お願い、するわよ。蘭さんを死なせたら…許さないから。私」

そして泣いた。
込み上げてくる涙や声を抑えようとせず、ただじっと
泣き続けた。

何もしないでと言う私の願い通り、何もせず、そこに居てくれて

そっと、私が一人じゃないことを知れた。

file.86　泣き虫（後書き）

哀ちゃんが毒薬を飲んだのは
「もうどうでもいいからあんなサディストに殺されるんならいっそ自分で死んでしまおう」
と思って飲んだのだと私は思っています。
「好きなの？」と怪しまれるのは
彼女が自己破壊的な思考の持ち主で、コナンは逆。
それが「火傷してしまう」と言う意味
違いすぎて「高低差で耳がキーンとなりそう」なんだろうと思っています。
でもコ哀は好きだ。
シリアスにしやすいしね。

ｆｉｌｅ．８７　引き出しの中の真実

思いっきり泣いた後、
彼はそっと、優しい笑顔と共に

「渚は、俺が何とかしてやるから」

と、どことなく心強いが、いささか不安な一言を残し、事務所へと帰って行った。

そして、一人残った時、ユエを思い出す。

そして私は引出しの中のＣＤＲＯＭと共に地価のパソコン室へと向かった。

＊＊＊＊＊

暗い、寒い部屋の中

「さっさと吐いたらどうだ、あの薬の正体を」

分かりもしないことは答えられない
ただじっと、痛みにこらえながら唇をかみしめた。
いざというときは舌をかもう、そう思いながら。

「ジンを押さえろ」

反響する、聞き覚えのある声に、伏せていた顔を上げた。

「ユェ…」

小さく、口の中でそっと彼の名前を呼んだ。

離せと、取り押さえられた人は抵抗を試みるが、
彼に指示されたとおり、ジンを取り押さえる男たちは大人数の上、
大柄だった。
ウォッカは銃を向けられ身動きが取れない様子だった。

彼が来たから…でもなぜ?

疑問が浮かぶ
ココは組織のたまり場で、そしてあの男達…
その数秒後、私は全ての状況を理解する事になる。

「志保」

手足に結びつけられていた鎖を全て取り外され
気が付いたら小さくなった彼の胸の中に居た

「俺は、組織に戻る」

その言葉で、全てが理解できた。
この男は、私の無事と引き換えに取引をしたのであろう。
虚しい。どうせ顔の割れてしまった彼はいずれ処刑され
私達も消されるのだ…無駄な事。

「お前は、逃げろ。」

その言葉に、黙って頷く

「志保」
「何」
「ゴメンな」

突然の謝罪に、彼の顔を久しぶりに見た。

その独特な紅い瞳には、悲愴の色が見え
彼は、きっと…私の代わりの彼の死を気に病むだろうとでも心配しているのだろうか

「ユエ…」

貴方に、この一言が言えたら…いいのに。
肝心な時に臆病になる。
「一人に…なるなよ」
彼はその一言と…

「ロゼ様、お時間です。」

「ああ」

大柄な男が告げると、彼は私の耳元でこう囁いた…

「俺の持ってきた鞄の右奥のポケットの中の物を…お前にやる」

そう言って、私の背中を優しく推した。

あの顔は…ずっと忘れられないと思う。

＊＊＊＊

入っていたものは、このＣＤＲＯＭと…
今身に着けているプレート型の小さなネックレス。

ロムには、壮大なロックがかけられていて、
三分の二ユエが解いた形跡があった。
彼のノートパソコンがあったから、おそらくそれで…
今はもうほとんど解いたが…

カチッ…

最後のキーを押したとき

全ての真実が解き明かされた…

『P――――――――――……解除しました』

ｆｉｌｅ．８８　姿（前書き）

ヅラじゃない、カツラでもないっ
只の抜け毛だぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！
期末が終わってからの抜け毛が酷いです。何で？

file.88　姿

「もとに…戻る方法が分かった？」
「ええ。」

――――ほんの昨日の事だ…。

ユエから譲り受けたＣＤＲＯＭに記されていたのは
ＡＰＴＸ４８６９の実験結果であり
過去にシェリーが残したものであった。

それをきっと…組織のパソコンでプログラムを改ざんしておいたのだろうか…

「バッカみたい…」

蘭さんから出された紅茶から、湯気が消えた。

「なぁ」

元太が声をかけた

「渚の風邪、まだ治んねぇのか？」

その言葉に、残りの二人も続く

「そう言えば…風邪にしては長引いてますよね」

「やっぱりお見舞い行きたいんだけど哀ちゃん」

黙りこむ哀。

「ま…ぁ、アイツの事ならいつかひょこっと出て来るだろ…」

そう、コナンがフォローをした

「大丈夫だよ、心配すんな」

真実は知らないにしても、その瞬間を居てしまった小五郎は
そんな空気に耐えられなくなったのか、持っていたビールを飲み干した。

そんな時

カチャ

ドアが開き

一人、中へ侵入した。

――――――――――ユエ…？

file.88　姿（後書き）

「さかたのまんま」
面白いです。楽しい。
ギャグも書いてみたいなと思いつつ…

近藤さん好きだな。
金あるし仁徳も。

感想評価等々お待ちしてます。

file.89　狂

「渚」

皆、その名を口にする。
奇跡の生還を果たした渚。歓喜の声に只彼はやんわりと微笑むだけだった。

（おかしい。）

そう感じたコナン。
あの渚が、まだ一度も戸惑う少女に言葉も掛けず、目すらも合わせていない…

「渚」

そう、小五郎が口にし席を立った時…コナンはその違和感の意味を理解した。

――――――レーザーポイント！？

その紅い光がガラスをすり抜けたことに気づくのが遅かった。

「おっちゃん、伏せろ！！」

黒い弾丸が、壁にめり込んだ。
硝子は割れることなく、弾丸を通したが…小五郎の方を掠めていた。
コナンは眼鏡に手を掛け。犯人をを特定しようとしたが

――――チャ

阻まれた。

「バカ、だから早く殺れつったろ」

そう発した聞きなれた声は、冷たく

「退け、後は俺がやる。」

指示を渡した後、銃口を、傷ついた肩を抑えた小五郎に向けた。

「脳裏に焼き付いた記憶は、
たとえ消したとしても僅かの視覚情報が残ってしまうんだ…
ふと、思い出してしまうこともしばしば…いくら俺でもそれは消せない。」

「何言ってるの…？分かんないよ…渚君」

歩美の問いかけに答えようともせず、残酷な笑みを浮かべてこう言った。

「Ｉ　ｋｉｌｌ　ａｌｌ　ｔｈｅ　ｍｅｍｂｅｒｓ」

（皆殺しだ）

――――――パン

暗転。

file.89　狂（後書き）

駅前のお祭りに行きます。
綿あめ食べたいですね…。

このあと一つ投下して行ってきます。

あ――――…人込みやぁ

file.90　銃口（前書き）

修正と
僅かの加筆…失礼いたします

file.90　銃口

――――――パン

サイレンサー月の銃は、あまり音が響かなかったが
少年たちは耳を塞いだ。

だが、小五郎に向かって放たれた弾は…

ゆっくりと、

それた……

ガッ、　ドサッ

結構大きな音とともに、渚が倒れた
銃の発砲と共に愛が、渚の頬をはたいた。

「痛った…」

渚が体を起こしたところでまた、
哀が手を振り上げた…

思わず、その様子にコナンは目を瞑った

しかし、放たれることはなく
渚の胸に、静かに置かれ涙が堕ちた。

その瞬間、渚の表情が変わるのを、コナンは見逃さなかった。

「志保…？」
「バカ…ホント…馬鹿。」

そう、言いながら抱き着いた。

そっと、耳元で何かを囁き、より強く彼女を抱きしめる。

コナンははっきりと確信した。

――――何者かに洗脳されていた。

あの後「記憶泥棒」の犯行は二件あった。
どちらも、重症。記憶はなくなっていたが大怪我であり

今までのロゼにはあり得ない犯行であった。

しかし、彼が操られた居たとすれば、
今までと異なっていた犯行としてもうなずけるだろう。

――――それに、灰原は気づいたのかもしれない。

「そんじゃあ…」

手当てを受けた肩を押さえながら、小五郎は渚に問いかけた。

「この俺様に銃を向けやがった理由(ワケ)を教えてもらおうか…？」

それは…と口を開きかけたが、ある言葉にそれを抑えられた。

「ダメね、殺さなきゃ」

漆黒の服に身を包んだ女性が、
プラチナブロンドの髪を靡かせ、吐き出すように言った。

「ベルモット…」

哀が、冷や汗を浮かべながら、彼女のコードーネームを口にした。
ベルモットは依然と、銃口を押し付けたまま、言った。

「嫌な女。」

赤茶色の髪に、黒い筒が押し付けられる。

「ジンの心も奪っておいて…私のロゼも…奪うの？」

まるで子供の様に、ぼろボロボロと涙をこぼしながら続けた。

「何でもかんでも持っていて、私の物も、奪うの！？

感心されて、信頼も、愛情も…全て私にないものまで持っているくせに！まだ！！」

強く押し付けられ、哀は少し顔を歪ます
渚はあっけにとられていた。
コンクリートに囲まれた部屋に
金切声が響く

「Ｉ　ｋｎｏｗ　ｉｔ　Ｗｈｅｎ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ａ　ｍｕｒｄｅｒｅｒ　Ｙｏｕ　ｓｈｏｕｌｄ　ｄｉｅ！
（私は知ってるのよ、あんたが人殺しだって！）
Ｉ　ｃａｎ　ｆｉｎｄ　ｈａｐｐｉｎｅｓｓ！　Ｔｈｅｒｅ　ｍｕｓｔ　ｂｅ　ｙｏｕ！」
（私は幸せになれたいの！アンタなんか死んじまえ！！）

一瞬の出来事だった

――――ダァン…！！！

「灰原！渚っ！！」

ベルモットの持っていた銃から、煙が立ち込めた。

file.90　銃口（後書き）

マグネット聞きながら描いています。

楽しい…ｗｗｗｗｗ

file.91　magnet（前書き）

磁石
好きです。
なんかあの間に指を挟むのが、楽しいんです。

file.91　magnet

何かの本で読んだ。

死を、目の前にした瞬間…一番大切だと思う二人は寄り添いあう。
無意識の行動。

…何の本だったか…

――――――――――バァン

只、音だけ

「バカね、空砲に決まってるじゃない」

只、愉快に笑う顔を、渚は睨みつけた。

「ユエ…」

心配そうな色が、哀の瞳に映る…

「でも、なんでそんな女庇うの…」

ベルモットの言葉に、渚は苦笑する、そして答えた。

「大切だからだよ…誰よりも…」

「そんな女でも…」

「そうだと言ったら…？」

「死ねっっっ」

銃口を向けた。

「やめろ」

低い、声が響く

「ロゼを殺るのは俺の役目だ、それにあの方がお呼びだ」

そう、ベルモットに指示をしたのは

「…分かったわ、ジン」

素直に、拳銃を下し階段を下りる。
そしてジンのポルシェのひとつ前の車に乗り込んだ。

「シェリー」

そう、目が合った瞬間反らされ

縋るように、渚の胸に顔を埋めた。
テレなんてそんなものじゃない、
ただの恐怖がその背中に張り付いているのは見てわかる。

「ロゼ、あの方からの命だ、二週間後…パーティに参加しろとの事だ。」

冷たい視線を浴びせながら

「まさか…お前も生きていたとはな…工藤新一…」

コナンを見て、そう言った。

「その日までは俺たちは何もしない…邪魔したな」

そう言って、去って行った。

「…工藤…新一…だと？」

まるで、寝言化の様に、小五郎は呟いた。

そして、コナンの顔を見る

――――――――俺たちが殺られたら…ここに居る全員の命はない…

そう、新一は理解した。

全ては、二週間後にかかっている…

＊＊

大事を取って、
あの時いた全員は毛利探偵事務所を後にし
阿笠邸で寝泊まりすることになった。
子供たちはしばらくそこから学校へ通う事になる。

そして哀は…

コナンに解毒薬を渡した。

「蘭さんを…泣かせたら許さないから」

そう、伝えて…

file.91　magnet（後書き）

進む。ノってる！

あと一話投下させていただきます。

file.92　雫（前書き）

書き直しました。

「志保、解毒薬渡したんだな」
「ええ…」
「お前の仕事はもうほとんど終わって様なもんじゃん。なのに」

二階の個室にある椅子の上で俯いている哀の顔を覗き込みながら、

「何でそんな顔してるんだよ」

泣きそうな…感じ

渚は思う。

「ちょっと…自己嫌悪…」
「何で？」

そう、問いながら床に座り込んだ。

「こんなことになるなら、作らなきゃよかったって」
「薬をか？」
「ええ…あんな…私欲にまみれた毒薬なんか…」

背もたれに寄りかかり、答えた。

「作らなきゃ、お前は殺されていたかもしれないだろ」
「…そうだけど」
渚は、はっきり哀の目を見て言った。
「アイツらは、近すぎてお互いの存在の大きさが分かっていなかったんだ。
このままじゃきっと、結ばれないまま終わるところだった。でも」
哀も顔を上げた。
「離れる事で、気づかせたんだよ。お前の薬が…いわゆる怪我の功名ってやつか？
あんま、気に病む必要はねぇよ…終わっちまったことは気にするなよ」
渚は、言った。
自然と笑みがこぼれた。
ユエの存在は志保にとって大きなものだった。
安心する。居心地がいい。
椅子から降り、隣に腰掛けた。
「ふっ…」
「何よ。」
「昔あったよな、こんな事」
ほんのニ、三年前の事が、懐かしい。

「雪が朝から降ってて、俺が風邪ひいて」
「暖炉の前でこんな風に座って温まっていたら、貴方が爆睡しちゃって…
ベットまで運ぶの面倒だったからそのまま寝ちゃったのよね。」
「朝起きたら志保まで風邪ひいてて」

楽しい。

そう感じる。

「ユエは聞いたでしょ…私が人殺しだって」
「ああ」

あれね、と…静かにつらい過去を語りだした。

――俺が消え、数日経った時…彼女はジンに強姦され
子を身籠った。産む気にもなれず、降ろした後に自分のしたことに
気が付いた。

「殺人者なのよ。私も。」

どうしたらいいの…

問いかけられるが、いい答えが見つからない

でも

それでもいい。

人殺しでも…お前がジンの子供を産まなくてよかった。と
俯いたまま渚は伝えた。
肩に伝わる熱が…滲む…

「元に戻ろうかな…私も…」

哀は言った。
迷っていた。
皆と、このまま灰原哀として過ごすか…
否か…

「このままじゃ、成長も出来ないらしいし…それに…」

「結婚しようか…」

その突然の言葉に、思わず聞き返す。

「このまま無事に生き延びられたら…結婚しよう。
志保といると、気持ちがいいんだ。指を絡めたり、舌を絡めるより
気持ちがいい。
上手い言葉が見つかんないんだけど…俺の存在をちゃんと作ってさ。
それで…」

「嫌」

驚きの返答に耳を疑った。

「え？」

俯いたまま、言った。

「嫌よ。」

ｆｉｌｅ．９２　雫（後書き）

観覧ありがとうございます！

此処までやっとこじつけた！と言った感じです。
もうすぐ百話行きそうで怖いです。
いっそピッタリで…なんてすみません…ｏｚｒ…

皆様のおかげです。これからもよろしくお願いいたします。

悦威カイ

file.93　哀（前書き）

新蘭が書けないいいい

file.93　哀

「新一ぃ…夕飯手伝ってくれない…」

キッチンから顔を出したところで、言葉が止る。
目の前で起こる光景が信じられなかった。

「新一」

呟く様に、彼の名前を呼ぶ。

「さっき…戻ったんだ。なんつーか…」

涙腺が緩み始める。

「久しぶりだな…」

新一は恥ずかしそうに微笑んだ。
蘭はこぼれた涙は拭き取ろうとはせず、ただ、両手を広げ言った。

「おかえり、新一」

伝わる熱が、
全てが愛しく思えて…

「只今、蘭」

温かい声が聞こえた時に
蘭は
自分は本当に彼が好きだったのだと…
実感した。

file.93　哀（後書き）

書き直させていただきました。すみません。

file.94　愛（前書き）

92から思いっきり書き直させていただきました。
すみません。
一応注意書きとさせていただきます。

file.94　愛

「渚」

そう、新一に名前を呼ばれた時
覚悟はしていた。

「今夜、話せることは話すよ」

真実

［名・形動］

1　うそ偽りのないこと。本当のこと。また、そのさま。まこと。「―を述べる」「―な気持ち」

2　仏語。絶対の真理。真如。

【Ｙａｈｏｏ辞書より　抜粋】

「まず、」

哀が言った。

「その携帯は何？」

夜。

月明かりなどない、雨の降る夜だった。

リビングの机の上に、開けたままのコナンの携帯を

哀は指した。

「これは…」

通話中の表記を見た渚は、あぁと頷いたところで

「服部が…」

『スマンのぉ、姉ちゃん。東都（そっち）に行くとこなんやけど…

試験中やて、お母んにとめられてもうて…こんな状態で参加させてや』

「ダメよ、貴方は関係ないから」

哀がそう言ったところで

「そうだな、あとで結果を報告してあげますので、じゃあな」

そう言って、携帯を切った。

「だろうな、とは思った」

新一は言った。

「それじゃ…」

砂糖を、たっぷり入れた紅茶をかきまぜ

新一に向かって言った。

「何から話そうか」

この時が来たと…新一は身震いした。

もう、組織はすぐ其処にあるのだ。

file.94　愛（後書き）

相手は新一のみ。
他は、そこまで深く知る必要はないですからね。

詳しい話は飛ばします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7271u/

願わくば、私の傍に…

2011年12月17日11時45分発行